壇浦兜軍記

作者　文耕堂
長谷川千四

序詞宵に起き旰けて食し。夜半に念ひ朝に行ふ故に。虞舜の居は三年にして都をなし。仲尼の政は暮月おのづから理るとは。今この時よ武将の中興。源の朝臣頼朝卿順はさるを禁め。賞罰を糺し絶えたるを繼ぎ癈れるを起し。民を安んじ衆を和す七徳八教谷七郷。賑はふ民の鎌倉御所へ大蔵の郷に。營居ある。地さしもさばかり手強かつし木曾の冠者義仲は。江州粟津の泡と消ゆ平家は亡き名を文字が闕に殘し。治國平天下の功古今に秀で。未だ家に先蹤なき大納言の大將。六十餘州の總追捕使。日本弓馬の棟梁となり給ふ事。併し佛神の擁護なりと。神祇を禮し百靈を懐け給ふ餘り。秩父の庄司重忠を以てさいつ頃より。南都東大寺大佛殿を再興あり。オクリ既に伽籃。フシ成就せりと。地本多の次郎近經を以て訴ふれば。根井の太夫希義岩永左衛門尉致連。其外當日の諸役人フシ膝を。屈し相詰めらる。地又者なれども本多の近經。召しによつて百分一に寫せし伽籃の繪圖。御座近くしつらひ掛け佛閣の高廣。莊嚴の次第外に記し捧ぐれば。逐一に上覽あり。詞重忠は佛智にも叶ひしか。わが思ふ如く造進せし條。嬉しや懈怠の善根を植ゑたりと。地御嬉しげに見え給へば近經はつと恐れ入り。詞こは冥加にあまる御詞。主人重忠造營の功を得たること。偏に君の洪福によつてなり。太政入道清盛は。伽籃を燒いて衆類を族滅す。君は伽籃を再興ある天地懸隔の違ひ。地恐れながら御子孫の繁榮極りあるべからず。鎭護國家の御基この上や候べきと。祝し申せば一同にフシ皆萬。歳と壽きける。地大奥の間の廊下口鈴の綱おとなひて。重忠の奥方玉房御前フシ御座の間近く。手をつかへ。地誰そお取次と伺へば頼朝御覽じ。詞珍らしや秩父の妻女。苦しからず直に申せ何事さふと御諚ある。いやお願ひは私ならず御臺様の御使。只今奥にて承れば。此度の大佛供養かねて君御上洛との御事。御臺様も御參詣あるべき御立願。地苦しからずば御一所に御上洛遊ばしたく思召し候へば。伺ひ奉れとのフシ御事なりと述べにける。地頼朝打頷かせ給ひ。詞いま四海一統すと雖も。木曾が餘類平家の殘黨。義經錦戸が討洩らされ。隙を窺ふ此時節うかつに鎌倉はあけがた

し。我は皆成就の後上洛すべし。この度は政子ばかり上洛し供養をとげ給へと申せ。地さあらば玉房附添ひ用意せよと御返答ありければ。玉房悦び是は〳〵お嬉しや。御臺様もさぞ御機嫌。お悦び申す爲と勇みて奥へ入りにける。地頼朝重ねて。詞いかに根井の太夫岩永左衛門。兩人共に政子が供し上洛し。萬粗忽なきやうに心を合せ計ふべしと宜へば。地根井ははつと當惑顔岩永左衛門進み出で頭を下げ。詞聊か御諚を背くには候はねども。かゝる目出度き御上洛に。臆病の飛沫かゝつたる老人と相役仰付けられ。心を協せ供奉仕らんこと身に取つて不承の至り。地此儀は餘人に仰付けられ下されかしと。根井の太夫を尻目にかけ憚りなく言上す。詞根井の太夫氣色を損じ。ヤア口荒涼なり岩永殿。あつと申さうや否と申さうや未だお請けもせざる内。臆病の飛沫かゝつたる老人と相役。不承なりとの言上ヲ、推したり。我が娘白梅を婦妻に所望ありしかども。愛甲の前司太郎が子を養子聟の契約せし故。承引せざるを憤つてのわんざん。卑怯至極とはつたと睨めば。ヤア左様の私の宿意を以つて御用を妨ぐる岩永には非ず。地何となりとも言はゞいへ。臆病者の相役には得ならぬ〳〵。詞ヲ、それも推したり。かの粋相州箕尾谷村の谷陰深く生立ち。熊猪は猫の鼠と持て扱ひ。形の如くかけ鳥などはすれども。未だ兵法の奥義を知らず。弓矢鍛錬の後家を知るべしと武者修行に出で。地過ぎつる源平の戰義經公の御手に屬し。實父愛甲の名字は勿論我が方へも未だ來らねば。根井とも得名乘らず。育ちし箕尾谷村の在名を取つて。箕尾谷四郎國時と名乘り。詞平家の侍上總の七兵衛景清に出逢ひ。少し汀へ引退きしを。弓矢不鍛錬の者どもが地臆病なりと取沙汰を。聞誤つての思ひ違ひ。をかしゝ〳〵と言はせも立てず。詞ヲ その戰ひは壇の浦船と陸との詞戰ひ。俗にいふ川向ひの喧嘩に等しく。箕尾谷四郎廣言放つて居たりしが。兵船一艘漕寄せ上總の七兵衛景清と喚いて駈く。地始めの詞には似ざりけり搔い伏つて逃げて行く。景清長刀おつ取りのべて討つならば眞二つになるべきを。詞よく〳〵の臆病者刃物汚しなぶり物にせんとや思ひけん。地長刀小脇にかい込んで箕尾谷が被たりける。兜の鍜を取り外してんがうまじくらむづと掴んでうんと引く。身を遁れんと前へ行く互にえいやと引く力に。鉢付の板より引きちぎつてこけつ。轉びつ口へらず。さるにても汝恐しや腕の強きと言ひければ。景清は又箕尾谷が首の骨こそ強けれとッゝ敵も味方も物笑

ひ。地なんと臆病者であるまいかと嘲笑へば膝立て直し。詞其時の軍奉行は土肥の眞平。箕尾谷は大太刀景清は長刀。手を碎いて戰ひしが何とかしたりけん箕尾谷。太刀打折れて力なく少し汀へ引退く。臆したるにはあらざる故御帳面にも其通り。記したりとの物語御帳面が證據よ。但し貴殿は左樣の時太刀打折つた軍は是まで。サア首斬れとて斬らするか。隱るも引くも軍の習ひ畢竟の勝を勝といふ。地殊に景清世に存へ君を狙ひ奉る風聞あり。我が悴また景清をつけ狙ひ恥辱を雪ぐまじきものならねども。それは後の沙汰必ず〳〵今の詞。忘るゝな岩永と。ェナ包む。無念の目に洩れて。地零るゝ涙を袖に隱し御前に向ひ。詞先年系圖に書き載せ上覽に入れたる悴行方知れず。不奉公者の親として歴々に立交り。座並を穢すも恥かしきに。況て御憲所の御供恐れ少なからず。御諚違背仕るには候はねども。この儀は餘人に仰付けられ某は本國に浪人の願ひ。所領を差上ぐると申すは冥加なし。地悴が安否を承り居くる迄。暫く預け奉り度く存じ候と。ッシ恐れ。入ってぞ述べにける。詞頼朝始終を聞し召し。地子によつて親々の名をも上ぐるに。老人の心遣ひ不便なり。上洛の供を赦し望みの如く所領を預り置く上は。返す事も又望みによるべし。浪人の住所は心の儘勝手次第逼塞すべし。本多は後備へ岩永は上洛の先手に進み。直ぐに都に止まり重忠に加はり。萬事沙汰せしむとも指圖に背き。我意の仕方あるべからず。詞就中上總の景清は平家無二の忠臣國士無雙と聞く。敢へなく討たんも殘り多し鬼もかうも重忠と計らひ。地穩便の沙汰あらまほしけれ。心得たるか岩永本多罷り立てと。簾中深く入御なり給ふ佛法王法この君より。再び榮ゆる秋津國盡きぬ。惠みぞ三重へ月日立つ。地春も漸くをはりの國夏になるみや熱田の宮。聞えは人の國迄も隱れ名高き御神にて。萬の願ひ取分けて惡氣厄難災難を。祈れば奇特をみやつこの散數く花をかき寄せて。神の御庭の朝清め散殘りたる其梢より。土にッシ春ある風情なり。春の旅。暇かならず寒からで思ひある身も折々は。心を開く白梅は。長地父に誘はれ故郷を出で先は近江の長濱へ長道中を是ぞこの。尾張の熱田と聞くからに。わざとも參らまッシほしかりし。いざと附々お供にて乘物吊らせ參詣ある。詞やい皆の者。この御社こそ楊貴妃の在所を尋ね。唐土の方士が渡りし常世の島。地色蓬來山とは笑ぞかし奇瑞尊き御神樣。皆信取つてよう拜みや。詞それにつき此お社の禰宜の娘は景清が妻なれば。こゝに隱れ忍び居まいものでなし。

我が夫の箕尾谷殿行方しれず。親子夫婦の名はありながら。地得逢はぬもまた父様の。知行差上げ住み馴れし鎌倉を立ちのいて此如く。旅他國なさるゝも彼れがわざ。詞景清と見るならば搔きむしつても恨みいふ心。地色其時は誰々も力を付けて賴むぞやいのとの給へば。乳人の澤田が御尤も〳〵。詞此人數が一口づゝ喰付いても。景清の一人や二人お氣遣ひ遊ばすなと。地力を添ゆれば〳〵、嬉しい〳〵。大宮司と問へば隱れないとや住家はいづく誰に尋ねうぞあれ〳〵あそこに人こそあれ。大儀ながら乳母問うて見や何の大儀と立寄つて。詞これ物問ひましよ。禰宜殿なれば知つてゞあらう。大宮司殿はいづくぞ敎へて下されムウ扨は旅のお人か。大宮司と申すは我々がお頭殿。今では二人あり御子息は夏茂樣とて今の世取。社の後な大門造りがそでござる。親御は通夏樣。地近年隱居なされ。海山を見晴らして漢面に館を建て。衣笠樣といふ娘御と一所にあれ〳〵〳〵あそこへ。白髮交りの惣髮大小差いて。女中が一人附いて見える。あれが通夏樣衣笠樣。社々拜なされてやがて。ツシ爰へと敎ゆれば。詞お姫樣聞いてか。聞いた〳〵。地願うてもない首尾待受けて詰開かう。ヤイ下下も乘物も鳥居の外に待つてゐよ。父樣お見えなされたら爰にと申せ。まだ見えるには間もあらうが其間に自らも。いざ神前へと引連れて。オクリ一禮。言はせ詣でらる。地春色花漠々たり。靄の百囀り。濱俗の地無何の鄉心自得すれば。壽彊無しと。ツシ口吟んじ。地色娘を伴ひ花に誘はれ浮れくる前の大宮司。詞掃除は誰ぢや福太夫か。此頃逢はぬ變る事もおりないか。アいや別に變る事もそれよ。たつた今旅の女中がお二人樣を尋ねて參られ。追付け此所へお出でなさるゝと申したれば。其間にお宮へ。ム、參つて來うというて往たか。ハテ誰ぢやな見えたらば逢ふ迄よ休め〳〵。地色身は折ふしの他國歩き近附きもあり尋ね來まいものならず。娘を尋ねてくる女中は。詞ハテ誰ぢやな。いや私でござすと。地立出づる白梅。イヤこなたなれば猶見知りが無いと。ツシ親子。詞ゑるばかりなり。詞其方に御存じなされいでも。此方は景清殿と譯ある仲。お前の方に忍びありと折々の文玉章に。お二人の事よう知つてゐる。地色久々顏も見ぬ故にはるゞ〳〵尋ね參りたり。早う逢はせて下さんせと心せかせて裏問へば。父は驚く衣笠は惡う呑込む早合點。其景清殿連れてござんせ逢はせうと。ツシ愛想なけれど言ひがかり。詞衣笠樣そりや學怯な。慥かに爰にゐる人を連れてこいとはこりや恪氣でござんすの。地ヲ、よい

合點さつきにから此胸の内くら〳〵と煮えかへる。本妻ぢやもの悋氣せいでは。とても悋氣と見らるゝからは逢はせます事ふつつりならぬ。詮ない事に際入れずと去なしやんせ〳〵。詞ムウそんなれば景清殿は實正かくまうて置かしやんしたの。ハテ入らぬ念を入れる人。夫が女房と一所にゐるが珍らしいか。いや珍らしうはない其一言を聞かう爲。地サア女子ども合點か心得ましたと一樣に。隱し差いたる一腰の鍔を鳴して聲々に。フシ通しはやらじと詰めかくる。大宮司娘を押圍ひ。詞ヤレ誰なれば女のざいに此體は興がつたり。地逃げ走りする我々ならず仔細を語れ名を名乘れ。詞ヤア小癪な事いはずとも景清を爰へ出しや。其上では言やらいでも名を名乘る。地それは無體景清は三年このかた在所を知らず。いや知らぬとは言はせぬと。爭ふ半へ根井の太夫走著き娘を制し附々を押鎭め。詞大宮司通夏といふは御邊よな。我等は根井の太夫希義といふ者是は我が娘。この度鎌倉をお暇申し。江州に蟄居する其儀はいふに及ばず。過ぎつる源平屋島の戰ひ和主が聟上總の景清。箕尾谷四郎と合戰の勝負それも聞及ばん。その箕尾谷と申すは某が養子聟是が夫。その場の恥辱面恥かしくや思ひけん。今以て行方知れず。夫を思ふ女心景清に遺恨を含み。今日此所通り合はせしを幸ひ。景清は和主が聟なれば隱し置かんと我にも知らせず此仕儀に及ぶ。殊更景清我が君頼朝公を狙ひ奉る御敵。かたく見遁しては通られず。地隱して館を搜されば。大宮司の浮沈たるべしサア景清を出されよとフシ退引きさせず詰めかけたり。ム、扨は聞及ぶ根井の太夫殿よな。最前御息女景清が妾なりと僞りも問ひ落さん爲。とは知らず娘は悋氣に取込み。拙者は却つて御息女に景清が在所を尋ねんと存ずる所。いやはやこちらあちらの仕合せ。地長々返答申すも旅行の妨げ手短かに申さう。平家の一門滅亡の後景清はかた切つて參りもせず便りもせず。此方の娘も懷かしがり。もし在所聞出さればお知らせに預りたしと返答す。詞ヲ、一旦の陳じは尤も。よく分別して見られよ。地一樹の蔭の雨やどり一河の流れを汲んでさへ人の情は捨てられず。況んや多年の聟舅女房を預ける程の景清。便りもせず參らずといふとも誰かさあらんと思ふべき。鎌倉殿御不審のかゝらん時も其言譯で濟むべきか。よい仕合せで歴代の神職沒收せられ。子供の流浪笑止々々。詞この理を辨へず隱し通すか根井の太夫惡い癖あり。かやうの事詮議しかゝり。言はずばよしとて搔いやりには捨て置かず。地館を搜さうか

但しは隠し置かず存ぜぬといふ證據。當社明神はいふに及ばず天神地祇を懲かし。誓言立つるか二つ一つ返答あれ大宮司と。ちつとも心赦さぬ面色大宮司横手をはたと打ち。詞ハア、御疑ひ御尤も誤り入つたり根井殿。聟の不便も娘の可愛さ。子供等が流浪に換へ所領に換へ地何しに包み申すべき。エ、淺ましや神に仕へても凡夫心今日の事を知らざりし。平家の一門都落ちの時此娘。景清と一所に落行かんと言ひしを。船に浮き波に臥し憂目に逢はん不便さに。預けんといふを悦びて預かりし其時。夫婦の縁切らせて預かるか取戻さば。今の疑ひは受けまじきに。よい年をして智慧なしと根井殿笑ひ給はん。恥かしや面目なやとはら〳〵と。フシこぼるゝ涙を押さゆれば。なう私も西國へお供せば一思ひ。なま中に預けられ夫は生きてありながら。二年三年便りもなく捨てられし我が命。惜しいではなけれども若しやと卑怯な心から。段々御苦勞させまする。赦して下され父様とスエテかつぱと伏して。泣き居たる。詞娘泣くな分別ある。なう根井殿。我が先祖は尾張の國のみやづこ。明神を戴き祭りて千百年。かりにも曲らず僞らぬ。誠を以て仕へし身の大凡俗と等しく。誓言立てん口惜しとは思へども。地恥も人目も子供等には替へられず。只今誓言立て申す疑惑の念を祓ひ給へ。清め給へとついに立上れば。ア、暫らくと根井の太夫走り寄つて抱きとめ。よしなき所望誤つたりもう誓言に及ばず〳〵。今の悔みの御一言わが心魂を貫いて。貴殿を疑ふは神を疑ふ勿體なし。とかく長居も神慮の恐れ早速ながらお暇申す。詞疑ひ晴れてござらうか。參る〳〵大宮司殿。地再會必ず期あらんと娘々も笑顔をつくり。隨分御無事で御達者でおさらば。さらばと三重へ立隔つ。フシ唐土人も。仲麿の歌を知るべにふりさけて。今や見るらん春日なる。スエテ三笠の山に出づる月ホオクリ空も。五つになる鐘の世上に響く東大寺。大佛供養も今日明日と諸國の人の參詣を。まつや町筋せばしとて山門の片邊り。取葺屋根に置く露に月の光も素海松茶の。暖簾の紋は釜敷に。土竈のフシ煙絶え間なく。買うて行く人。賣る人は。女主の顏貌むつくりとして味さうな。蒸立て饅頭買はしやんせ世間に類は多けれど。歌には青丹よしと詠み奈良饅頭の。餡もよし。殊更神の御誓ひ慈悲饅頭のむし〳〵は三笠の山に咽が鳴り。五重甑に立つ湯氣に春日の。里は賑へり。地こゝに平家譜代の忠臣上總七兵衛景清。薩摩五郎信忠といふ者あり。一門御落命の折柄ともかうもなるべき身の。生は難く死は易し。長

生して主君の仇を報ぜんものと山林に身を委ね。時節を窺ひ居たりしが今度大佛供養のため。頼朝上洛とほのかに聞いて。心を合はせ隠家をゐでの玉水日は暮れて。急げど初夜に奈良坂や。饅頭賣る家の床几の端暫く。ヲヒ御免と佇めば。詞是は何處より御參詣なされしぞ。夜に入りて御苦勞や。ゆるりとお休み。地遊ばせと挨拶片手に煙草盆。お二人ながら酒のなりそな御風俗。お厭かは知らねども所の名物お慰みにと差出す。饅頭より先づ女房の。ヲシ笑顔ぞ一口喰はまほし。地景清は只一心に術を工夫し返答せず。五郎店借る追從に。詞尊い寺は門からと申すが。そもじの風俗で饅頭の味も思ひやられた。見れば暖簾にも行燈にも書いてある。家名は十一屋か。この心推量致した。饅頭を十買へば一つ添ゆるといふ心で十一屋と付いたのさうか〳〵。ほんに是もよい御推量。成程左樣と申したいがこつちの心はさうでない。朝七つから店出して夜の四つに店仕舞ひ。七つと四つの時を合はせて十一屋と申します。是も尤も。朝々上洛召されしと聞く付々もさぞあらん。其外の參詣諸國の入込み。左程精出さいでは賣り屆くまい。なんと斯程結構に。諸堂廻廊以下再興し。肝心の此山門ばかり殘したは心あつてか。但しは節約か。音に聞いた程にもない。頼朝は地否いやつだとヲシ打笑へば。詞いや〳〵此山門は往昔。聖武皇帝樣といふ王樣の御建立なされたなり。平家の惡坊主清盛入道が。この大佛を燒いた時殘つたは此山門ばかり。能登守教經といふ大惡人が。大佛樣へ射かけた矢が反れて此山門の垂木に當つた。矢の根矢幹が今にある鷲よう見さしやんせ。如何に怖い者がない惡い事がしたいとて。日本第一の佛樣を燒き崩すといふ樣な惡人がま一人とあらうか。佛ばかりかあの堂では五百人八百人。此堂では千人二千人。人ばかりも四千人程燒殺した其報い。火付けの大將頭中將重衡。京鎌倉を引渡され。はては衆徒の手にかかつて七日晒され首斬られた。其跡が山門の脇にある是も明日見さしやんせ。左樣に段々と惡行の積り積つた果は平家の今の樣。主にも家來にも頭を差出す者一人もない。此山門に手もかけず其儘殘し置かるゝは。末代平家の惡逆を。人に知らせて嗜ません世の見せしめぢやとの物語。私が樣な何も知らぬ者でさへ。尤もさうに存じますと。地それと知らねば女の口ヲシ齒に衣きせぬ長咄。地餘所に聞きなす景清が本意なさ悲しさ口惜しさ。胸もヲシ碎くるばかりにて忍び。涙にくれければ。地生中のこと問ひ出して五郎も返答あぐみはて。詞あつて過ぎた事には

必ず付けつ添へつがあるもの。地なんの平家ばかりがさう悪うもあるまいと言消せば。詞いえ〳〵こんな事ではない。まだ大反れた悪事がある咄しましよ。いやもう地承るに及ばぬと。聞かぬ先から耳蔕かす四つの鐘。オクリ響き。渡れば地あれ四つが鳴る店仕舞ひ時。おの〳〵様も宿取つてお休みなされそこ退いて下さんせと。いふを幸ひ遁分。フシ過分と立退けば。地色簞に水打ち行燈消し道具一つも取直さず。片方の葭簀さら〳〵と引廻せば。五郎見かねてこれ女中。詞藏へ入れた物も盗み取る世の中。それは近頃不用心。まそつと念を入れて置かれよと氣を付ければ。いえ〳〵。盗人の徘徊したは平家の代の時。今の源氏の慈悲深い。靜謐な世にそんな氣遣ひちつともない事。戸さゝぬ御代とは地今の時代でござんすと。口も手許もしやん〳〵と仕舞うて別れ立歸れば。よしない事を又いうて。一度の恥に二度の口。フシ塞ぎ兼ねてぞ見えにける。地景清五郎をかたへに招き。聞かれたるか五郎殿。賤しき女の口すら斯くの通りなれば。地色御一門の身の上を世上の嘲弄思ひやる。主君の仇を報ぜんと死すべき命を存ゆれば。死にまさる恥を聞く。詞この山門に鏃矢幹を其儘置いては。末代平家の譏を殘す。頼朝を討つは是を取捨てゝ後の事とは思はずかと囁けば。げにもげにも口づから傳はる事は中絶する折もあり。直に見するは情なし。地というて夜の手業には取捨てもなるまじ。人間を覗ひ畫の事といはせも立てずヤアまだるし〳〵。詞一心の眼力を以つて探さば眞の邊の足首を摑んで差上げば門の冠木に手は屆かん。それを傳うて二階へ上り垂木を一々探して見られよ。詞なう其段は御免あれ。御存じの我等眩暈病み。高い所へ上れば忽ち發る。土の上の働きは何なりと指圖には背くまじ。ア、聞いてさへふら〳〵と目が眩ふやうなと。地頭を抱へ胸押撫づれば。よし〳〵人は頼まじと草鞋ぬぎ捨て身を固め。柱を傳ひ上らんと立寄る所に。上り大路の松蔭より。人聲足音高提灯見え來れば。折悪しゝなう五郎殿。やり過し後又こそとフシ打連れ木蔭に忍びける。地山門の内より只一人長刀を杖につき。のつさ〳〵と來る大衆雙方行逢ひそれと見るより。詞ハア、岩永左衞門殿候な。御家來にも仰付けられず御大身の輕々しく。御自身の御勤め御苦勞なりと挨拶す。ヲ大目坊か。身は御寮所の旅館へ參上し只今退出申す。夜中に只一人いづかたへ參らるゝ。元來和僧は平家の譜代上總の忠清が弟。景清が叔父なれば我君のさす敵。疾く誅せらるゝ

筈の所を身が取持ち。兄弟とも不通致し只今は平家の縁なし。御疑ひ晴るゝ程の御奉公申上げさせんと請合つて接いだる首。何か打捨て平家の餘類を尋ね。一手柄なうては此左衛門まで虚言者になる。隨分心がけ召さ。ヤ。それに付き和僧が甥の。景清。存らへて此世にあり。及ばぬ仇を報ぜんなどと斯樣の時節心がけ。和僧を頼み來まいものでなし。地さあらば快よく頼まれ密に知らされよ。討つてなりとも搦めてなりとも岩永が。高名にせねば武士道立ち難し其意趣は。詞景清に遺恨はなけれども。箕尾谷の四郎といふ者景清を付狙ふと聞く。その箕尾谷に討たせては根井の太夫が娘を我が手に入れる事叶はず。景清を我が手で仕舞ひ箕尾谷にも鼻あかせ。地根井が娘を我が手に入れたさ。事を分けて頼み申す合點か。詞是は何より易い御用。ちつともお心苦しめ給ふな。斯樣な御用あらうとは存ぜず。我等が高名に仕らんと工面致し置いたれども。其許へ奉る地安堵なされと懐中の。一通取出し手に渡せば。提灯持てと火影に照らし。見ては悦び讀んでは頷き。戴いて懐中し出來た〳〵御坊過分。委細は其時さらば〳〵。提灯參れと夕露のフシ草踏散らし通りける。地後に立つて景清は始終とつくと聞きすまし立出で。詞貴僧は大日坊にて渡らせ給ふな。地我こそ只今岩永に頼まれ給ひし。上總の七兵衛景清と聞いて俄に仰天顔。詞イヤ驚き給ふな悉く承る。岩永に御返答は間に合ひの僞りか。眞實の御所存なれば手は見せぬ。御出家と申し叔父甥の誼を存じ。下手くろしう念に念を地入れ申すといはせも立てずさて〳〵面目ない。詞佛祖冥利今の返答が眞實でたまるものか。いやと言へば即座に命を取らるゝ。それ悲しいではなけれども。存へて善果を積まんため間に合ひとも〳〵。御一門の滅亡聞くと等しく案ぜしは和殿が事。地健固の對面滿足せり。今宵こゝへ來りしは深い願ひあつての事。打明けて語られよ何れの道にも疎畧なしと。無二の詞に心解け手をつかへ。詞貴僧の爲にも平家は主君。たとへ出家の御身なりとも。あへなく頼朝に亡され給ひし鬱憤は殘る筈。あはれ景清に力を添へ頼朝が假屋へ忍び入る。地手引をなされ下されとスエ思ひ。込うでぞ頼みける。詞ヲ、易いこと〳〵。地手引せんと拔打ちにはつしと打つをひらりとかはし。其手を取つて引かづき大地へどうど打仆け乘かゝり。詞ムウ叔父ながら實の入つた惡人ぢやの。掛替もなき弟の汝を勘當なされ。追拂はれし我が親の忠清殿は目水晶。ヤイ親程こそあらずとも景清が底の根性見拔くまいか。最前かく

と知つたる故眞二つにとは思ひしが。叔父は親の孝もあり禮儀もある。鬼角いふ内心を飜せば。互に主君の御爲と地堪忍せしもう是まで。觀念せよと挫ぎ付くるヤア待て景清。詞ちつと緩めて言ふ事いはせい。おのれ叔父を殺したらば從來がようあるまいぞ。近い證據は左馬頭義朝が子の源太義平。叔父帶刀前生義賢を殺した故。惡源太と異名を付けられ。六條河原で首斬られしを知らぬか。おのれも我を殺したら。惡七兵衛と笑はれんよう分別せよと減らず口。ヲ惡七兵衛は愚かの事。鬼七兵衛蛇七兵衛とも言はゞいへ。地何ともないと腮に手をかけ首捻ぢ切らんとする所を。薩摩五郎飛んで出で利腕取つて引退くれば。透をあらせず大日坊弓手の腕しつかと取り。うんと聲かけ景清が兩手を二人が土に捻伏せ。詞やい景清。いかに二相を悟るとも薩摩五郎が此體は合點が行くまい。大日坊と某つひに對面はせねども書狀を以て牒し合ひ。此度の大佛供養を幸ひ頼朝を討たう。いざ往かう〳〵と某が勸めたは。頼朝を討つでない汝を眞斯うせん言合せ。深い工思ひ知つたか。なう大日坊。我が出るを待兼ねたであらうの。待兼ねた段ではない。景清が名を聞き貴殿も御出でとは知つたれども。顏見ぬ内は幾瀬の案じ。書狀も岩永の御目にかけ見え次第同道申す筈。地幸ひの土產サア繩打つて連行かん尤もと。腕捻廻すにちつとも動かず。景清くつ〳〵と吹出し。詞もうぬかす事それ迄か。死人になつて物はいはれぬ。言うて置け〳〵。ヤア死人とは誰が事。地言ふ事ももうないと フシ汗水になつて身をもがく。言ふ事なくば是見よと左右を一度に腕がへし。ころ〳〵轉び打ちながら生捕りには叶ふまじ。首にして連行かんと拔合はせ。挾み立てゝ斬りかくる得たりやおうと渡り合ひ。互に磨きし刄の光。月に嘯く春日野の飛火を散らして三重（斬結ぶ 地大日坊が頼框。頤かけて斬付くる其太刀風に薩摩五郎。一人立では叶はじと フシ跡をも見ずして逃失せける。地エ、大腰拔けの討漏せし腹立ちと。大日坊に乘つかゝり吮のくさりをぐつぐつと。突きならす鐘の聲。詞一つ。二つ。三つ。四つ五つ早七つか。地八つ九つも我が耳へは入らざりし。やがて店出す饅頭屋が葭簀の陰に忍びぬて。とくより親ひ見るとも知らず衣引剝ぎ袈裟もぎ取り。すんぼろ坊主に剝ぎむくり一色殘さず掻抱き。死骸を蹴散らし忍び行く叔父の首斬る其代り。名字の上總も言切つて。惡七兵衛景清とは フシ此時よりぞ申しける。地色女房葭簀を蹴出で扨こそ〳〵。ノリ地景清と見た目は違はぬ君を狙ふに疑

ひない。斯ういふ内も御臺様の御前が氣遣ひ。假屋へ行かうか但し夫に知らせうか。いや。景清が落先を見付けて置くが肝心かんもん饅頭屋が。蒸立て見よと囁ひ行く。餡もよし 地又思案よし健氣。なりける 三重一聲春日山。鹿立つ峰の朝風に。敵の榮華や。散りぬらん。江戸上總の七兵衛景清は。今度の供養に頼朝を討つて濠霧を散ぜんと。扮裝つ衆徒の似せ姿素肌に。きたの伏縄目。滋金物の大鎧。草摺長にざつくと著上に。衣の玉襷。袈裟を結んで鉢卷し。敵を冥途へ送りやる。十王頭の脚當に我身を守護の毘沙門小手。重代の痣丸。フシ脚絡長に結びさげ。地フシ跡に續きし女房の。心しめたる高からげ油斷せぬ氣は一腰の。鯉口早く拔きかけて附從ふともしら柄の長刀。小脇にかい込み見渡せば。廻廊諸堂悉く。家々の幕兵具を飾り警固。嚴く見えたりける。地音せで通らば惡しからんと所々に大音上げ。警固怠り給ふなと呼ばはつて駈通る。こゝぞ頼朝の假居と思しく。襞白の大幕風に靡いてフシ悠々たり。地サア仕果せし嬉しやとのつさ〳〵と歩みしが。いや〳〵。詞内も用心さぞあらん。千里の馬も躓き。傷つて不覺を取らば一期の瑕瑾。地不敵だては無益ぞと汀の鷺の小鮎を。狙ふ忍び足。待てと一聲かけ、れば。さしもの景清びつくりし振返る。詞なう肝の太い景清我が君を討たうとは。あたゝか饅頭屋の女房と思やつたらあんの外の食ひ違ひ。誠は本多の近經が妻の唐綾。昨夕逢うた賢えてか。一寸も奥へはやらぬ返せ〳〵。ヤア小癪なり。女相手にする景清ならず。地すつ込んでゐよとフシ取合はず。詞いや〳〵。そつちにせいでもこつちになると。地ずはと拔いて打ちかける詮方長刀取直し。石突にて受流し結んづほどいつあしらへども。詞女に奇特の太刀捌きヤア際入る 地面倒なりと。石突取りのべぐつと當身に本多が妻。目くるめいてフシたぢ〳〵。地打捨て歩み行く先の幕をひらりと押上げて。打掛もるゝ追取り刀。秩父の奥方玉房御前すつくと立つ。思ひがけなく景清はフシ又びつくりし。て立ちとゞまる。詞ヤア〳〵唐綾。誰を見て景清呼ばはり。其景清どれどこに。地ハア それこそと敎ゆればいや〳〵。詞是は所の衆徒。あの扮裝が唐綾目にかゝらぬか。景清ならば平家にとつても仁義を兼ねし勇者と聞く。地色我が君を狙ふとも尋常に名乘りかけ。神妙の働きこそあるべけれ。詞卑怯なさもしい姿を替へ。女ばかりの此假屋へ大人氣なう何と來られう。必ず粗忽いやんな。これ坊様。今度の供養に頼朝様は上洛なされず。こゝは御臺所政子様の

お假屋。坊主の來る所でない歸らしやれ〳〵。但しは方角に迷うてか。ヤア〳〵大衆の馳走人。地本多の次郎近經道しるべせよとありければ。はつと答へするすると立出で。詞斯樣の御用もあるべきかと地とくより木蔭に待受けたり。詞我等本多の次郎近經。頼朝公の御諚を請け。大佛供養の内大衆方の御馳走。また猥なる仕方あれば戒めも我等の役。地方角に迷うての推參ならば道の案内せん。狼藉ならば計ふ旨あり。サア返答を承らんとフシ空知らずしてにちかゝれば。詞ヤアいま〳〵しい何の坊主。形を替ゆるは一旦の計略頼朝を討つに二つはない。上總の七兵衛景清見て置けと。地頭を包みし袈裟かなぐつて捨てければ。扨はと二人の女も詰めかけ〳〵眼に氣をつけ油斷なし。近經暫しと奥を諌め女房を制し。詞ヤア景清。我が君を平家の仇主人の敵と。狙ひ奉るは以ての外の僻事なり。太政入道朝恩を忘れ。動もすれば天子を惱し民を苦めし其積惡。地後白河の法皇院宣を賜はり。平家を亡せよとの勅諚なれば。平家の敵は身の驕り。我が身を我が身の敵とは知らざるか。詞良禽は木を見て棲み忠臣は君を選んで仕ふ。心を改め只今より。頼朝公に奉公せよと呼ばはれば。ヤア頼朝に奉公せよとは何の囈言。二言と吐かば諸り殺して地くれんずと齒がみをなし。エヽ口惜しや今度の供養。頼朝上洛したれども。かくいふ景清を始め平家の餘類を恐れ。御臺と世上へ思はせん爲。わざと女ばらを召連れたりと薩摩五郎が注進を。彼が我を誘ひ出す計略とは心付かず。嬉しや本意を達せんと。忠を一途に形をやつし忍び入り。よしなき骨を折つたよなフシ景清が。地心ざす敵は頼朝一人聽病風引込んで鍾倉に隱れかゞめば力なし。詞女ばら本多風情五萬十萬斬つて罪造り。本望のほの字にも屆かず。先づ此度は歸る〳〵。地時節を待つて頼朝が頭は景清が手裡にあり。かねて名殘りを惜しんで置けと傳へよとしんづ。しんづと立出づる所へ手の者引具し。岩永左衛門どつと押寄せ。詞ヤア腑甲斐なし近經景清をなぜ返す。手に餘らば左衛門が受取つた。薩摩五郎はなきかあれ討ちとめと呼ばはれば。地本多は左衛門に打任せ皆々制して假屋に入る。身輕に扮裝つ薩摩五郎飛んで出で。詞なんと景清。五郎が計略段々とこたへるか。我等岩永殿の御蔭にて知行にも主付く筈。美しくば降參せよ。傍輩のよしみ取次いで得させんと扇つたり。景清眼をくわつと見開き。逢ひたかつたにようせた。汝ばかりには殺生も佛も入らぬ。地手並はかねて知つつらんと大白黑鬼の其勢ひ。長刀柄長

くおつ取りのべ微塵になさんと渡り合ふ。百獣の洞の内獅子の荒れたる如くにてオタリはらり。はらりと雑立つるフシ其勢に。地岩永左衛門人一番に逃失せたり。主人が逃ぐれば手の者ども影さへ見せぬ其中に。五郎一人が勝手は知らず度に迷ひ。うろたへ廻るを引捕へ。詞せず様もなき人非人と大地にぶち付け。しつかと踏まへ 地一捻ぢ捻ぢてぐつすりと。首引抜いて突立ち上り。見れども假屋鎖まつてフシ手さす敵もなかりけり。地よし〳〵今度は通すとも我が見込んだる一念力。岩にも入り。雲にも乗れ。鎌倉山にも箍らば箍れ。山を劈き岩を割り。つひには本意を達せんものと長刀。小脇に掻込んでしんづ。しんづとフシ出で行く道。狭からぬ天が下。敵を助くる仁者の道。古主を忘れぬ義者の道。歩むも道の道ながら誠の。道は世々にひく弓矢の。道をしるべにて行方。定めずなりにける。

第二

地清水や大慈大悲の深如海。誓を結ぶ御縁日その佛閣の下河原。菊水の邊の辻講釋漢楚軍談三國志。講師關原甚内と紙に記し柱にかけ。紙衣の長もいき詰まりし浪人らしく一腰ぼつ込み。聴衆を引受け見臺にかゝりフシ本引開き素讀みする。

詞章此時漢王自ら丞相府に至つて迎へ給ふ大將軍を見れば韓信なり。樊噲色を失うて御車の前に拜伏して申しけるは。韓信は漂母に食を乞ひ市に胯をくゞりし者なり。今大將軍に拜し給はゞ項羽聞いて大きに笑ひ天下の諸侯も漢中に人なしと嘲らん。必ず止め給へと申しければ蕭何走り出で樊噲無用の舌を動かす事勿れ。我不才なれども丞相の職にゐて大將軍を薦め。事既に定つたり。樊噲を縛づて獄に下し給はずんば。諸大將皆無禮に傲はんと申しければ。漢王武士に命じて樊噲を縛らせ給ふと。さて昨日の講釋は漢楚軍談五卷目。張良が割符を以て蕭何曹參兩人が。韓信を大將軍になされと勸め申した所でござります。今日はその次漢王壇を築いて韓信を拜すと言ふ條。扨只今素讀致いた樊噲が人柄は。各々方の思召すは定めて色眞赤に頬髭荒れ。我儘氣隨の大力日本で申さば。ア坂田の公時か公平などが樣にあらうと思召しましよ。なかなか強いばかりでござりませぬ。智慧第一といふ張良陳平にも劣らぬ大分別者と聞えました。時に。分別といふは。此本文の如く樊噲が韓信を大將軍に拜なさるる事は。無用なりと止めたる科。それ縛れといふや否やがらり後手三寸繩。牢屋へついと引いて參つた。そこで供先がもやつき出した。あそこではちよびくさ爰

ではぶつくさ。何ぞと聞けば樊噲殿さへあの通り。況や我等韓信を大將軍になさるゝ事御無用なりといふたら最後。だまれ〳〵と幾千萬の大將士卒皆韓信が手下に附いた。なんと我が身一人縛られて大勢の口をとめ韓信が下知を聞かせた樊噲は。力ばかりでない大分別者ではござりませぬか。地色尤もと悲衆も聞取り餘念なく。心上なる空かき暮れ俄に一村降りくれば。やれ大降と夕雨の足もとまらず聞く人の。皆ちり〴〵に逃歸り殘るは甚内只一人。邪魔な雨やと夕立の跡晴れ渡る講釋小屋ッシ又人寄りを待居たる。降る雨は。とても角ても凌ぎなん。涙の雨は晴間なく凌ぎかねにし衣笠は。長地父大官司に誘はれ親子密かに故郷を出で志す方そんじよそこと。昔に聞きつゝ音羽山フシ清水を尋ね來りしが。地色片方を見れば講釋小屋に人待つ風情。幸ひと立寄りて。

詞これ物問はう五條坂はいづくぞや阿古屋といふ遊君の。所を知らば教へてたべ。ハア是はお連れも女中がた。遊興なさるでもあるまいハテ面妖な人をお尋ねなさるゝな。されば阿古屋といふ女に逢はいで叶はぬ我々故。尾張から遙々尋ね參つたり。はてそれは遠方から御大儀千萬。これ此道を南へ行當り左へ上る道がある。それを一丁半程いて花扇屋の戸平次と尋ね。阿古屋と問へば隱れがない。是は〳〵忝ないさりながら。名も家名も覺えにくい筆があらば貸してたべ。いや筆は有合せず。其お持ちなされた扇子を鼻へ斯うお當てなさるれば。花扇地つい思ひ出さるゝと座興も老の律儀に受け。此扇を鼻へ當てればはな扇コリヤ出來た。講釋なさるゝ程あつて頓智發明覺えた覺えた。御禮は重ねて〳〵とフシ娘を誘ひ尋ね行く。地かゝる所へ捕つた〳〵と聲高く。檢斷所の捕手の役人ばら〳〵と駈來り。講釋小屋をおつ取り卷く思ひがけぬど豫ての覺悟。甚内床几をひらりと飛び後の高垣小楯に取り。小屋の柱の節間近き陳竹取つて押し撓め身構へし。詞ヤア人違ひか名の誤りか。講釋は致せども召捕らるゝ覺えなし。上を恐れ奉れば刃物に手はかけねども。仔細を聞かぬ其内は細もかゝらずサア。譯をいへ聞かんと八方睨んで扣へたり。ヤア小賢しき咎め上意を背くか。仔細は御前で直に聞け。地色物な言はせそ打ちすゑて引括れと一番手。十手振上げつつかくるさしつたりと飛違へ。ゆがめし竹の片手を放せば眞甲より片鼻かけ。はつしと彈かれ眼くらんでたぢ〳〵〳〵。よろぼひ逃り引返す。二番手は刺股を捕つたと突出す狙ひをはづし。沈んで裾を跳ねさすれば向脛をあいたしこ。眞逆樣にでんぐり返り隙をあ

らせず三番手。詞棍棒取りのべ卷いて拂らんと突出す。心得たりと身をかはしつつと入つてすてつぺい。微塵になれとしつぺい彈き棍棒からりと投捨てゝべつたり土につくばうたり。地色一人がかりは敵じと大勢四方を取廻し。亂れかゝるを事ともせず脛骨肩骨當る所を幸ひに。力ありたけ人ありたけ節を碎き手を碎き。心を碎いて凌ぎけるされども防ぐは只一人。終に大勢折り重なり フシ押さへて繩をぞかけにける。地色惣頭半澤六郎成清駈付くれば組の小頭罷出で。雙方の働き具に相述べ目通り近く引据ゆる。六郎立寄り面體より形恰好。とつくと見屆けびつくりし。詞扨こそ〳〵早まつたる事したりな。似は似たれども御尋ねの者には非ず人違ひ。それ繩とけとありければ。地色捕手どもぎよつと互ひに顏見合せ。解き兼ねて立兼ぬれば繩付きも フシ共に。驚くばかりなり。詞ヤア關原甚内とやらん繩かけし間もなく解けといふさぞ不審立つべし。我が主人の相役岩永左衞門殿。夜前對顏の節和殿が噂。下河原にて辻講釋する甚内といふ者こそ。平家の侍惡七兵衞景清に極まつたり。月番なれば重忠の手より召捕り給へとありし故。某を召され召捕り來れさりながら。世には似たる人もあり粗忽の仕方すべからずと仰せを受け。實否を聞き糺ふ其内に組の者ども手柄を爭ひ此仕合せ。彼等が麁相は六郎が誤り手を摺り申す宥免せられよ。さるにても一腰を帶しながら。上を恐れ刃向はざる神妙さホウ働きの健氣さ奥ゆかし。地色甚内といふが實名か名乘られよ。披露して爲惡しくは計はじと。立寄つて繩解きほどけば氣もほどけ フシ扨はと。安堵してげるが。地色飛退つて手を突かへ。詞是は却つて恐れ入りたる御詫言。日本一の剛の者と聞き及ぶ景清に似たる故。御疑ひに預りしは身に取つて恥辱に非ず。重忠の御内に誰あらん半澤六郎成清殿。地色繩解いて下さる上何を不足に。一言の御恨み申すべき殊更身の上御尋ね。申さねば結句憚りあるに似たり。詞關原甚内と申すは今日渡世の假の名にて。誠は井場の十藏一幸と申す浪人者。一人の老母養育の爲。面をさらす辻講釋物賜べなうと乞はざるばかり。地色世に住む甲斐もなき身の上。お尋ねによつて物語御恥かしと差俯向き。スエテ涙ぐみて見えにける。地六郎下部に持たせたる鳥目十藏が前に置かせ。詞和殿古き文にも見つらん。龍も池中にある時は蚯蚓に類を同じうすれども。上天の氣を得る時は勢ひ宇宙に溢るゝと見えたり。地色今浪人の世渡りは何をしても恥ならず。立身出世はやがての事隨分老母に仕へられよ。輕少ながら此鳥

目老母の方へ進上申す。詞必ず〳〵人違ひに渡世の邪魔せし心付けなどと思はれそと。聞きも敢へずいや〳〵〳〵。只今一錢でも申受けては人違ひの埋忍代となり。詫言の料などと難人の口にかけられては。貴公も我も一分立たず無用なりと。戻さんとせしが待て暫し地老母に下さるる志。突返しては無禮の至り申受けては快よからず。ハテ何とせんかとせんと邊を見廻し。それよ〳〵是奉る觀世音。老母の二世を加護し給へと片方に立てたる清水のフシ賽錢箱へ投込んだり。地なう其義心を見るにつけいよ〳〵粗忽面目なや。此旨主人に言上すべし又對面せんいささらばと。一禮述べて立歸る權威に募らず誤を。誤り入りたる六郎が。素直も秩父の家柄とフシ却つて譽めざる人はなし。地十藏跡を見送りて。詞エ、花も實もある武士や。萬一外の役人ならば己が粗忽を包まんと。何のわけも聞入れず今時分は後手にヲ好かぬ事〳〵。こんな時は早く歸つて母者人の地お顏を見るが身の祈禱と。一人呟き是はさて。小屋を粉灰に打ちめいだと散り散ろばひし木や竹をフシ拾ひ集むる折こそあれ。地色深編笠に世を忍ぶ浪人めけども儲ある男。菊水の邊に立休らひなら講釋殿〳〵と小手招き。ヤ誰ならんと立寄つて差覗き。詞是は御浪人樣此頃は見えもなされず。今日は觀音の御緣日定めてお參りなされうと。今朝から心待ち致した今御參詣かお下向か。お聞きなされて下さりませ。私を惡七兵衛景清ぢやと申して。重忠の家來半澤と申す者。たつた今參つて召捕らるゝ處人違ひに極り歸りしが。御覽なされ小屋も打碎かれ。地色お腰掛けられと申す所がないと氣の毒がればそれ餘所ながら見申した。詞なう其惡七兵衛景清とは身どもが事さ。エ是は思ひがけもない其景清樣が何故に。去秋お目にかゝりしより御不便を加へられ。今頃拂底な金銀を。毎度々々なぜ下されたと肝潰せばいやまだ跡に段々ある。一時に肝潰すまい。今日半澤六郎が召捕りに來りしも。御身が形恰好この景清によく似たる故。其似たる故某豫て思ふやう。天下の武將頼朝を狙ふ我なれば。却つて我を詮議も厳しく用心もまた嘸あらん。頼朝に心ゆるさせ油斷を窺ひ討たんには。此講釋師をこまづけのつ引きさせず腹切らせ。景清運拙く切腹せしむる者なりと。書置を添へ置かば。すは景清こそ腹切つたんなれと。京鎌倉心ゆるし油斷は必定。其虚を窺ひ討たんものと分別し。折々與へし金銀は。和殿を殺さん命の價とは知らざるかと。地聞いてぎよつとし驚き顏の色違へば。詞いやぎよつとせらるゝな。まだ驚く事がある

花扇屋の阿古屋が兄の井場の十藏殿と。地いへば大きに仰天し。詞して〳〵私の本名阿古屋と兄弟といふ事。なんとして御存じなされたと興さませば。面體恰好の似たる貴殿さへ。景清かと詮議ある我なれば厳さを推量せられよ。都に足は止め難し一先づ立退かんと思ふにつけ。五條坂へ立越え阿古屋に出逢ひ。右の段々を語れば涙を流し。其講釋師甚内と申すは井場の十藏といふ。我が兄なりとの物語。地色我も聞いて興さめしが假初ながら馴染み深く。子まで懐胎せし其中に。今迄それとは何故知らせざりし。其心では我が事も兄には咄すまじと尋ぬれば。詞大望ある御身の上兄にも心置かれ。露ばかりも知らせずと我を庇ふ阿古屋が貞心を聞くにつけ。地色我が禍を貴殿に塗らんとその時まで思ひ詰め物語りし。我が悪念空はづかしく一生赫めぬ此面を燃え立つ様に覺えしぞや。詞知らぬ内はそれも是非なし。知つては片時も捨て置かれず。地色今宵立ちのくを明日へ延ばし我が心底を打明け。縁者の因を結ばんとわさ〳〵是まで參りたり十藏殿と。スエテ思ひ佗びたる面色に。餘りの事に呆れもせず。詞扨は阿古屋を不便に思召す方よりと。老母が方へ度々のお心附も貴公よな。地色ハアはつとばかりに差俯向き暫く。フシ詞もなかりしが。地色エ、悔しや此事を昨夕にも今朝にも存じたら。半澤が來りし時我こそ上總の景清になり濟して。仕樣模樣もあつたもの遲かりし殘念やと。拳を握り身を震はし。フシ目をすり。擦るばかりなり。詞なう其心底聞いたる故。逢はで行かんも本意なさに是迄は來たつたり。構へて〳〵我が事は心の端にも懸けらるゝな。骨柄といひ器量といひ。奉公すとも易かるべき身なれども。地色老母の末期を見屆けんと諸人に面をさらし辻講釋。三錢五錢の志に命を繋ぎ。恥を忍ぶ親孝行感じても猶餘りあり。阿古屋が縁に連なる我なれば。貴殿の老母は我が母なり七十に餘り給ふと聞く。此世の逗留未近し起き臥し心を付けられよ。詞著古したれども此羽織これを貴殿へ參らする。今迄送りし合力は塵塚に捨つる塵埃。地泥に投ぐる石瓦に劣つて。恩にあらず情にあらず。是ばかりこそ景清が誠の心を染め羽織。朝夕肩に打掛け一所に孝行。フシ頼み入る。地心せかずば立寄つて老母のお目にもかゝるべきが。世をも人をも忍ぶ身の無禮御免と傳へてたべ。隨分健固に又對面お暇申すと立出づる袖に縋つてなう暫らく。詞心は千萬止めたけれども。忍ぶも且は智略の一つ。して〳〵落行く先はいづく言ひ殘されよ。されば〳〵今宵は上の醍醐に一宿し。其行先は又そこにての

思案次第と思はれよ。ヲ尤も〳〵何をいふも爰は途中恐れあり。詳しき事は跡より追付き物語。地我が行くまでは必ず必ず逗留あれ。これ斯う〳〵と耳に口外には誰も菊水の。井戸を隔てゝ囁き合ひ先づそれ迄はさらば〳〵。ヲ、さらばと互ひの目禮思はずも映る姿の。水鏡。詞それ十藏殿その顏が此面と。なう景清殿その面體が我面と似たではないか。似た段か。思へば半澤六郎が見違へたるはハ、ハ、笑うて別れ別れける。勇者は離別に歎かずとはかゝる。事をや三重へゆふ間ぐれ。フシ物の文目も。見ぬあたり。地小家がちにとすさみぬる筆の跡には引きかへて。町の模樣も風俗も。えならず見えし五條坂黃昏。時を戀のひる懸行燈の灯影さへ。本フシ白く咲きたる軒の端。地色花扇屋と隱れなし。家名ばかりは人めきて主人を問へば戸平次とて。こゝら名うての横着者色と慾とを二道に。フシ稼ぎ歩きて歸り足。地表の口よりわめき聲。詞こりやどいつも店にけつからぬ。たづた今日が暮れたにどこへすつ込み臥つてをるぞ。竹め林めと地呼立つる下女も小女郎も所ずれ。詞ヲウヲ結構な旦那樣。内はお客でてん〳〵舞ひお料理よ吸物よと。上を下へと返してゐるに。今頃戻つて内外の者は何になれ。アレお手が鳴るアアイ地お林ちやつと往てたもと。忙がしがれば何ぢや客が取れた。詞町人か二本か喰ひたい物喰うてずいぢやないかよ。いえ〳〵歷とした旅のお方。お供の衆に問うたれば尾張の國のさるお方。今度京へ忍びの御遊山。内方の阿古屋樣を聞及んでのお望み。隨分御馳走申せと現銀の支拂ひ。地昨日の晩の丁字頭がこんな小判になりやしたと。一包み差出せばこりや出來しをつた。天晴忠義と金に逢うてはほや〳〵顏。障子の隙より奥差覗き。詞さうして阿古屋は座敷に見えぬが。こりやどこに何してゐる。いえ〳〵阿古屋樣は實過ぎから。祇園の佐野屋へ送つて。それから直ぐにいつもの清水參り。地ほんに奇特なお樣でと言ふを打消し何が奇特。詞嬉しがりもしられぬ觀音殿へ參らうより。此おれに靡きをつたら何ぼ程利生があらうぞ。地イヤよい事を思ひ出した清水へ逆寄せして。戻る所ひつ捕らへ日頃の思ひ晴らしてくりよと。言捨てゝ出づる門口へ町の歩きが申し〳〵。詞何事が起つたやらお代官のお使が。名主樣を會所へ呼付け目の拔ける程叱つた上。花扇屋の戸平次を連れて來いと苛立の口上。サアちやつとござりませ。ハテきよと〳〵しいあの面わいの。高が何ぞの言渡し。ちよぼいち張るな畏つた第一の宿ならぬ心得たと。地判さへ押せば濟む事

留守ちやとは吐かさいで。胴因果な猿松め。サア失せをろと先に立ち膨れ面して出でて行く。白波の。寄する渚にあらねども。涙も流れの假枕。跡なき夢は。つい覺めて。送り迎ひの。袖の露伊達にふつ〳〵。阿古屋とは。浮世にすねし戀の闇。照らす廻しが提灯に小オクリそれと。印の花屋。主人がもとに立歸る。奥の座敷に。待つも久しき宵の月。あやしの籬かけ造り障子半蔀おし明けて。隔てぬ中の親子連れ。地前の大宮司通夏は娘相手の氣晴らし酒。人の氣を汲む小女郎が酌。お待ちなされた阿古屋様今お歸りと知らせるにぞ。國許までも隱れなき花の都のお女郎。さあ〳〵是へと老人の不束ならぬ挨拶に。地様子ありげの一座とは見て取る阿古屋が胸の中。上面は伊達の勤めぶり。詞ほんに浮世は味なものこんな侘びた所さへ。色里の數に入り遠い國まで隱れなく。阿古屋を見ようの呼ばうのと。心づくしに預るは苦界する身の身に取つては。忝ないとも本望とも萬の事は差置き。飛んでも戻る筈なれど。地色心に任せぬ憂きふしとて立破られぬ先の座敷。斷りたら〳〵やう〳〵今遲いは赦しなさんせと。煙草吸付け差出せば。地女中は煙管戴きて花も實もある御仰せ。先づ盃とも申さうが。父様とても自らも尋ね聞きたい譯あつて。心がせけばと差寄りて。詞平家の侍七兵衛景清殿。過ぎつる壽永の秋の頃御一門の御供し。西國に下り給ひしが御身の上に恙もなく。都に歸りましますと慥な便り聞きながら。終に一度の便もなし。そもじの事は豫てより聞いて知つたる深い中。七兵衛殿のお身の上。地御座り所も御存じならめ姫御前は相互語つて聞かせて給はれと打付けに問ひかけられ。扨はといよいよ心にをさめ。詞其お尋ねは何の事。七兵衛さんやら八兵衛さんやら一座流れのお客の名。當座は覺えてゐもせうが跡が跡迄それがまあ。地色寺方かなんぞの様に過去帳に付けては置くまいし。わしや知らぬわいな。殊に深いの淺いのと微塵こつちに覺えのないに。そんな事聞きや遣瀬がないと流行詞で紛らかす。地父の老人そばより引取りいや是は御尤も。詞世間存ぜぬ田舍女。我が胸ばかり合點して藪から棒の尋ねやう。なんの有様を答へ召されう。斯く申す拙者は尾張の國。熱田明神に仕へ申す前の大宮司通夏。是なる娘は衣笠とてかの七兵衛が連添ふ女。霹程も隔心ない中。前の大宮司通夏とは豫て沙汰にも御聞きあるべし。ナアニそんなむつかしい歌がるたにある様な。長い名は今が聞初め。地衣笠さまでも塗笠様でも。知らぬ事はしよ事がないと

けんもほろゝに言放せば。地色そんならどうでも我が夫の景清様は知らぬぢや迄。エ、さもしいぞや汚いぞや。詞さすがは娼婦一夜妻少心に引較べて本妻の衣笠が。悋氣嫉妬の氣もあろかと疑うての事ぢやの。慮外ながら熱田の大宮司長袖とばかり思うてか。二腰差いて武士の行儀。地其娘の衣笠がなんの卑怯な妬みがあらう。夫の噂の様にもない見ると聞くとのお女郎と。心の蔑しみ穂に出づれば猶も勤めの氣質を見せ。詞妬みがあらうが鼠があらうが。知らぬから構ひはせねど素人女子の癖として。流れを立つる身とさへ言へばさもしいとのみ心の嘲り。地口へは出ねど顔へ出てはしたない本妻呼ばはり。本妻ぢや妾ぢやとて夫を思ふに二つはない。詞ヲ、其思やる夫の行方否でも應でも知らさにや置かぬ。こりや新しい可笑いわいの。面々の夫の行方を此阿古屋に無理に知れか。アレまだしらじらしいあの顔わい。地エイつべこべとあの口わいと互に募る女の意地。煙草の愛想も引換へて二人が燃やすしゆ羅宇の煙管。かつちかち〳〵灰吹の口も小裂るばかりなり。地折しも井場の十藏は講釋の場の人違へ。不慮の難儀を遁れし上景清が情の程。妹阿古屋に語らんと志したる宵の間の。人目にかさす扇屋の内に通れば下女小女郎。是はマア久しぶり珍らしい御出でと。いふに阿古屋が氣の配り。尻目遣ひの羅越し見馴れし羽織の紋所。兄十藏とはつゆ知らず顔は背けし燈火の。景清と見るよりも悪い所へ疎ましと。思ふ心に思はず知らず。まあ〳〵今宵は去んで〳〵と頭振る。詞いや此兩人寵り歸らぬ。夜が明けうが日が出ようが。尋ぬる事を聞かぬ間はいつかな事にじらぬ。地ヤアえいとこなと床の間の木枕取つて寢ころぶにぞ。詞ヲ、何時迄なりと氣根次第勝手次第。勝手に〳〵地座敷へは差合ひぢやと。心を碎く言廻し十藏何の氣も付かねば。次の座敷に人待顔。詞アレまだ去なずぢやエ、辛氣。氣に喰はぬ座敷べら〳〵とは勤めぬと。地すつと立つて間の障子ぱつたりさすがに衣笠は。おぼこ育ちの氣も弱く何と詞をかけ造り。下の座敷と隔てして心を。明かさぬうたてさよ。地阿古屋は次へ立つや否。時も時折も折ひよんな所へ景清様と。縋り寄つてヤア兄様十藏様。詞さつても似たり横顔なら形振なら。地瓜を二つ其上にこの羽織。どうして召してと不審顔胸撫でさするばかりなり。詞されば〳〵似たに就いて。今日は既に危ない事と。地耳に口寄せこま〴〵と暫らく語る其内に。垣間見したる前の大宮司娘引連れ。詞やあ〳〵掣殿見付け申した。地お隠れ

あるなと聲かくれば衣笠も後に寄り。是なう聞えぬ景清樣いか程忍び給ふとも。手づから仕立てし此羽織見違へてよいものかと。身を引廻し顔を見てヤアこなたは今日の講釋殿か。ハツ恥かしと差俯向き。スエテ皆し詞もなかりしが。地此羽織召すからは景清殿のお行方。此方が知つてに極まりし。わしに聞かせてフシ給はれと賴むに。も亦涙なる。地十藏も重ね〳〵取違へられ氣もとまくれ。挨拶しどろに呆るれば。詞いや〳〵兄樣合點がいくまいあなたはな。尾張の熱田の大宮司樣お娘御の衣笠樣。誠あるお方とは常々噂に知つたれども。地今の身柄の景清樣お爲いかゞと心を隔て。時の拍子の言ひかゝり深うお隱し申せしが。衣笠樣聞いてたべ。景清樣の御事は今兄樣の御話。鎌倉よりの詮議强く。都の住居も折惡しければ。暫らく他國に身を隱すと。暇乞ひさへ言傳業。日陰のお身のおいとしさとフシ語るも聞くも涙なる。地父の老人十藏に打向ひ。詞景清は早京地を立退き。行方も定かに知らぬとな。べん〳〵と尋ね歩くも正眞の闇に礫。幸ひかな其許の形恰好景清に似たる上。定紋のすわりたる其羽織を著されしは。我が神道の一體分身取りも直さぬ七兵衛景清。此前の大宮司が逢ひたい用事外ならず。娘衣笠に暇をくれ夫婦の緣を切つてたべ。地賴み申すと差付けに思ひ込んだる一通り。聞いて驚く衣笠姫父樣それは何おつしやる。お心の亂るゝ程御酒は上らずそもやそも。俄に狂氣もなされまいが。詞夫婦の緣を切らさうとは國許でおつしやつた。お詞とは天地の違ひ。わしやつんと合點がいかぬ。ヲ、合點はいかぬ筈。都に上り夫を尋ね連れ歸らんと言うたはな。此父が嘘ぢやはやい。世になき平家の討洩らされに。緣を聚ぐは身の滅亡。切腹か遠島は鏡にかけていやゝのく〳〵。地義理も情も脊中に腹といふに悲しさやる方なく。日頃は義理も惠みもある父上と思ひ暮せしに。いつの間に其樣な卑怯なお氣になり給ふ。スエテ淺ましさよとかき口說く。ヤア地ぐど〳〵と叶はぬ事是でも非でも景清に。緣切らさうと極めた胸變ぜぬが神道の第一。詞サア景清の一體分身。娘衣笠に暇をくれ召さ。地一家の因が切りたいとフシ詞鋭に揑ねかくる。地十藏もぎよつとせしが。エ、につくい心底恥かゝせて腹癒んと。詞ヲ、神道の一體分身面白し。我が世渡りは軍書の講釋。奬喰を語れば奬喰が魂。張良を說けば張良が心ばせ。地其理を以て七兵衛景清が。性根になつて返答すると老人が頤先。顏突付けてはつたと睨み。神は非禮を受けずといふに穢れ不淨の魂にて。面の皮の熱田の

糟糊宜。そつちから望まいでも。こつちに添はぬ女房去つた〳〵と詞も引かぬに衣笠姫。詞イヤ推參な十藏。澤山さうに人の女房。地去つた〳〵としこなし顏しやほに可笑しい。寄るも〳〵氣違ひのある條この衣笠は相手にならぬぞ。詞相手にならうがなるまいが舅が心見下げし上は。男のこうけ雜別々々。ヲ、此父が呑込むからは如何にもさつぱり緣は切れた。地いえ〳〵何ぼおつしやつても。景清殿は金輪際わが夫。斯う言うたらてつきりと勘當。親子の緣を切らうであらうが。詞親子の緣を切らうより此首切つて下さんせ。地夫ゆゑに死ぬる命塵とも灰とも思はぬ。是程に思ふのに景清樣の返答は。どうであらう講釋殿と理に責められて十藏も。感ずる心に面を和らめ。詞ヲ、出來したり女房ども。其心底を聞いてはどうも去られぬ。やつぱり元の女夫々々。いや此な男はぐれり〳〵と心の揃はぬ景清。一旦舅が貰うた暇。いやさういうても約束變改。ヲ、さうでござんす何時迄も緣は切らぬ。地いや此親が是非去らすいや去らさぬと三方論議。フン更に果てしもなき所へ。地會所を戻る主人の戸平次。いつに變りてぐんにやり首途方にくれし其風情。思案中戸に差しかゝれば。奥には三人せり合ふ聲大宮司の景清のと。噂ちらりと聞耳立て。ハ嘉息もせず窺ひゐる。地内には斯くとも白髮の父何時迄かくと爭うても。せんなき事と詞を知らげ。詞十藏殿阿古屋殿。我が一通りを聞いてたべコリヤ衣笠もよつく聞け。總じて世界の女の子は生れし親の家を離れ。夫に任す身の上なれば子とても親の儘ならず。さるによつて親の科を娘にかくる法もなく。娘の科は勿論。親の身にかゝらぬ事。天下一統の式目。景清を聟に持つたるとて鎌倉殿の御咎め。あるべき筈はなけれども爰に一つの誤りは。景清西國に赴く時節。戰場まで女を具せんも如何なり。預け置かんと頼みし故。地今の離儀は氣も付かず。うか〳〵と預り置き疑ひかかる聟の緣。エ、一生の不調法悔しい事をしたなあと。割つたる茶碗を接いで見るに等しき愚痴に立返り。そゞろに子供の可愛さ不便さ。鎌倉殿の祟に逢はゞ如何なる憂目に逢はんも知らず。詞ア、恐しやと思ふより所詮我が身の義心を捨て。地衣笠に緣を切らさば三方四方の爲よしと。思ひ詰めたる老の思案臆病者の義理知らずと。笑はゞ笑へ子供の爲。弓矢取る身にも非ず長袖の身ぢやものと。得手勝手に分別極め。生れ付きの片意地ごかしに是程までは遣り付けしに。娘が誠の心底に感じ入つたる今日の景清殿。尤もとは思ひながら父が心も思ひ分けて

衣笠を去つて下されい。恥を捨てゝお頼み申すと神に仕ゆる身ながらも。子故の道は踏迷ひ胸の岩戸を引立てゝ。フシ常闇の夜と知られける。地衣笠は猶悲しくお年はさても寄せまいもの。それ程迄にお心の愚にもなるものか。親を人に笑はせて子の身として嬉しからうか。思ひやつても下さんせ。ヲヽそれ程の事辨へぬ某ではなけれどな。汝等がため世話いるに親にも違ふ胴張者と。氣を揉み苛つ老泣きにたぐり上げたる持病の痰火。せき上げ〳〵せき入れば。それ〳〵それがお世話から疎ましの片意地やと。脊撫でおろしまああれへと元の一間へ勞れば。十蔵兄妹あいたロフシ塞ぎ兼ねてぞ呆れねる。地今迄萎れし戸平次が樣子を聞いて氣はいそ〳〵。詞是は阿古屋の兄貴よい所へようわせた。二人ながら近う寄りや一大事の談合がある。まづ高が斯うぢやは。代官所の侍が會所へおれを呼付け。抱への阿古屋を此方へ渡せ。景清が在所を責めさいなんで言はすというた。談合とは爰の事。阿古屋よう聞いてたも。兄貴の前で言ひにくけれど。疾うから其方に惚れてゐるは。其人をいとしなげに責めうと言ふ所へおつというてどう遣れう。其上にたつた一人の奉公人。花代なしに屋敷へやつては。口を天井へ釣つて置屋の商賣がならねば。呼屋の衆も迷惑。そこで味をやつたの。いえ〳〵此方の阿古屋にそんな客はござりませぬ。其上疾うから私が女房に引上げ。今で勤めはさせませぬとぬつぺりとやつたが。代官も賢い。兎角阿古屋を連れ參れ直に尋ねると手詰の詮議。こゝが談合の要所よう聞きや。是を幸ひにおつと言うて女房になつてたもれば。景清が詮議マアそもじにはかゝらぬの。兄貴さうぢやないか。それでも代官が呑込まぬか。そこに一つの上分別こゝが又談合の要所。あれ今奥へ往た大宮司が娘。阿古屋が代りにこいつを捕らへて御穿鑿なされませと。地訴人したら褒美は少な〳〵鐚十貫。それを資本に女夫連で。金紛して遊んだら面白かろではあるまいか。十蔵殿は小姑妹聟の戸平次が。講釋さしても置くまいぞや。サア此談合いやか應か。應なら極樂いやなら地獄フシどうぢや〳〵と氣を苛つ。地二人は目まぜに頷き合ひ。是は段々尤もの御分別。詞なんの是が談合どころあつと申せ妹。

花扇屋のお内儀樣とは。氏なうて玉の輿と饒うて見すれば。詞ム、ウ兄貴よい合點。いや見かけに似合はぬ埒明ぢやわいの。サア阿古屋どうしやる。地色さればいなわしぢやとて木でも石でも作らぬ身。まんざら憎うも思はねど兄樣や母樣の。心を今迄氣兼ねの遠慮。おつと讀めた皆

迄いふまい。そんなら女夫になる氣ちやの。詞はて扨兄の十藏が水入らずの仲人。ほんにさうぢや祝うて三人打つて置け。しやん〳〵。地シ、イ奥のお客を逃がさぬ樣に。御馳走申しや女房ども。たつた今會所へ往て褒美の十貫擔げて戻ろと。己一人が胸算用はき違へたる足元は。草履下駄やら雪駄やらヲシ心も付かず走行く。地十藏跡を見送つて。詞これ〳〵妹。一寸伸ぶれば尋伸ぶると僞りは僞つたが。高の仕舞ひは思案があるか。ア、兄樣には似合はぬ案じ。地此間に衣笠樣いづくへなりとも落しまし。代官所へは潔よう此阿古屋が捕らはれて。責殺されるがせめてもの景淸樣へ志。わしもお前の妹ぢやもの。ヲ、出來したり神妙なり其心底を聞けば安堵。某は今宵の內景淸へ追着き件を語り。一時も早く都を退かさん。落着く所は知るべあつてと。語ればちやくと兩の耳に手を押當てゝア、これ〳〵。詞景淸樣の落着く所わしに聞かせて下さんすな。聞くまいと言ふ其心は。いかなる火水の責に遭ふとも性根亂れぬ其內は。隱し拔かうと思へども。心の底に覺えあらば身の苦しさに氣も弱り。口走るまいものでもなし。地色わしやそれが悲しさに。乞ひ求めても聞きたい知りたい夫の行方上の空。世界の女房の風上にも置かれぬわしは因果人。お腹に宿した此嬰兒もよく〳〵の業人。哀れと思うてフシ下さんせと忍び。涙ぞ果てしなき。地十藏も心根を不便としをるゝフシ氣を取直し。地ヤア最前の詞に似ぬ未練の歎きに際取りて。衣笠殿に過ちあらば心の操皆むだごと。ぬかるな妹十藏ははや往くぞと。跡にも心殘れども先も恩ある義理の道。フシ立別れてぞ出でて行く。阿古屋は思ひの。胸押下げア、我ながら愚痴涙。何として泣いたぞと心に心恥しめて。奥の一間を覗へば。はや表には提灯の光も權威のはい〳〵〳〵。戸平次は先に立ち鬼の首を取つたる心地。女房ども〳〵阿古屋はどこにぞ。代官樣がお出でぢや奥のお客は何としたと。問へど返事もうろつく內。庭に入込み代官がさも横柄にいかつ聲。詞熱田の神職前の大宮司通夏はいづくにある。斯くいふは岩永左衞門が家の子荒木源五といふ者。御邊の娘衣笠惡七兵衞景淸に。緣を組めばお尋ね者の一類。尋ね問ふ仔細あり急ぎ此方へ渡さるべし。違背あらば理不盡に踏ん込み繩打つて連歸る。返答如何と呼ばはつたり。地前の大宮司通夏少しも驚く氣色なく。刀提げ娘を圍ひしづ〳〵と立出で。詞岩永左衞門殿の下知として。我が娘衣笠を召連れて歸らんとは。景淸が在所尋ねん爲なそれならば無用になされ。西國落ちに別

れてより景清が行方すんど存ぜぬ。地隙費えを言はんより立歸つて此通り。岩永殿に聞かされいハレ御大儀であつたなと。嘲り詞に荒木もむつとし。詞イヤ知らぬとて知らせずに置かうか。地それ戸平次ひつ立ていといふに阿古屋がいや〳〵いや。詞彼方が御存じないといふ證據にはわしが立つ。かんまへて聊躍せまいぞ。地親方の戸平次殿と言ふにびつくりけうと顔。こりやどうぢや女房ども親方とは何の事。うろたへたか女房ども〳〵。詞エイいやらしい女房とは誰が事。五條坂の阿古屋は景清が妾と。地世間に隠れない中を人聞きの悪い女房呼ばはり置いて貰らを。イヤ其筈ぢやあるまいがな花扇屋のお内儀様。打つて置けしやん〳〵を忘れたか。仲人の兄はどこへ往た兄貴々々とうろたへ眼。源五にばつたり行當るをはつたと睨めつけ。詞阿古屋を女房とは、け纏ぐは娘の役その片意地を見て置け大きな偽り。地おのれとても遁さぬ奴。此上は二人の女連歸つて拷問する。サアサア大宮司娘を渡され。詞忝なくも鎌倉殿の御代官。岩永左衛門が下知を受け向うたる某。身不肖の侍と侮つて頃くひ違へ。地後悔ばしせらるゝなと權威に任す理猛詰め。返答もせず默然とフシ暫し思案にくれ居たる。詞ヤア人にばかり物言はせうんともすんとも答へぬは。地上意を嘲る科人其方とても遁しはせじと。詞荒らに責めかくる老人ほつと息をつぎ。膝を打つてホゝウさうぢや。愚痴に返つた老耄今目が覺めたと持つたる刀。娘の前に投出し。詞汝も前の大宮司通夏が娘ぞよ。父が今まで立抜いた片意地むだ事にせぬ様に。合點したか狼狽へなと。地以前の未練に引替へて詞も凉しき目の色に。衣笠刀押戴き親の讓りの片意地。受と。すらりと抜いて戸平次が肩先すつぱと斬下ぐれば。うんと仰向に伏しながら撓まぬ剛氣にむしやぶり付く。源五もさすが武士の役。刀に手をかけ支へん風情父はすかさず押隔たり。詞ヤア騒がれなお侍。其許の相手には此皺腕と鍔元くつろげ。地抜かば斬らんず勢に氣を呑まれてぞ控へゐる。戸平次は深手ながらしがみ付かんと身をもがく。起しも立てず乘つかゝり。ぐつと刺いたる止めの刀フシ女業には甲斐々々し。地大宮司聲をかけ。詞父が讓りの片意地是までは見屆けたり。して其跡は何と〳〵。地アイ此跡はかやうにと持つたる刀の切先を咽にがばと突立つる。ヲゝさなくては叶はぬ筈。コリヤ死に損ふな立派にせよと。瞬もせず守りゐる。衣笠顔を振上げてア、有難や父上の。未練のお心翻へり健氣のお顔見て死ぬれば。親子の縁も切れぬといひ。大宮司が

娘こそ景清が妻なりと。末世末代言はるるは我が身の上の諸願成就。神の教への高天が原。佛の道の極樂淨土に今ぞ赴く嬉しさと。苦しみ包む笑ひ顏阿古屋は詮方うろ〳〵涙。手負は次第に息弱り今こそ娑婆の黃昏時。つひには萎む夕顏や。五條あたりの白露とッシ消行く身こそ果敢けれ。地父は歎きの色目もなく。四口論によつて戸平次を討つて棄てたる娘の衣笠。自害したれば算用濟んだり。此上にも言分あらばと苦り切つたる面色に。地ハテ相手同士死ぬる上は此方に構はぬ事と。歎きに沈む阿古屋を捕へッシ物をも言はせず引立て行く。地大宮司は本意なげに跡見送つて死骸に寄り。四ヤレ娘出來してくれたさりとてはよう死んだ。エエうぬ〳〵戸平次め。よう訴人しをつたな。よい氣味な目に遭ひをつた。さりとてはようは斬つたぞ殺したぞ。此親が老に落れ子に迷ひ。埒もない分別違ひ恥のありたけ吐き出したに。お事が死んでくれたので魂がさつぱり。地景清殿のお聞きやつたら嘸嬉しかろ褒美であろ。今の立派な最期の體を見せぬが殘り多いわい。健娘を持つたと思へば心がいそ〳〵するわやいと。死骸を暫し押勳かし。四ほんにそなたは死んだもの。生きてゐる者の樣にくよ〳〵と世迷言。まだ愚痴未練が直らぬと叱つてくれな笑うてくれな。もうどうも堪へられぬ。一生の未練納め心のたけを泣かせてくれと。湛へ〳〵し涙の溜り。わつと叫びてッシどうど坐し前後。不覺に見えけるが。四ハツアさうぢや誠にさうぢや。娘が最期の一言に我身の納めを知らせしな。地浮世の塵に交りて神に仕ゆる齡もなし。神道より佛道に赴く手本は聖德太子。今より法の修行に出で四天王寺に參詣し。諸人に勸化を勸むるこそ娘が菩提我が身の爲。有難し〳〵と差添拔いて髮打切り末打斷ちて立出づる。斯程涼しき佛の道何とて熱田の神垣と。隔てはあらじ此世の迷ひ。祓ひ給ひ淨めで給ふも利益は。同じ南無阿彌陀佛の六字は。六根清淨と悟り。行く身ぞ賴もしき。

第三

地鳧の脛短しと雖も之を續がば憂へなん。鶴の脛長しと雖も之を斷たば悲しみなん。民を制する事此理に等し。されば治る九重に猶も非常を警戒の。水上清き堀川御所當時鎌倉の嚴命に從ひ。秩父の庄司次郎重忠禁裡守護の代官として。兼ねては民の公事裁判私の計ひなく。道に曇らぬ十寸鏡智仁のッシ勇士と聲けり。地同席に相並ぶ岩永左衞門致連。南都東大寺の建立より直ぐ樣都に押止まり。重忠

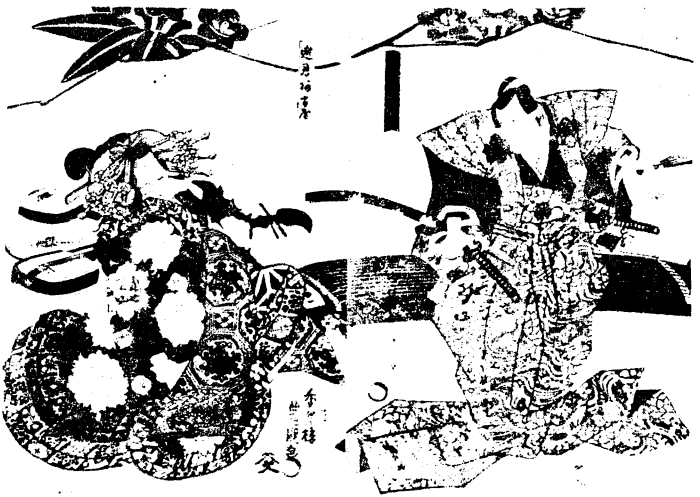
の助役と號し惡七兵衛景清が。在所を搜す邪智佞奸表は忠義に見せかけて。おのが遺恨を差挾む心の底の二股竹。虎の威を借る狐とは。きよろつくフシ顏に現れたり。詞當日の取次役兩人の御前に出で。清水の瀧御坊。地御出でなりと披露につれ大廣間より入り給へば。はや〳〵是へと請ぜらる。法印重忠に向ひ給ひ。平家の侍七兵衛景清。瀧坊に入り來らば搦め取つて出せよと先達ての御使者。尤も平家盛んの時節は彼の景清。觀音を信じ七十五里の境を隔てし。地色尾張の國より日參せしは世の人の知る所。然るに壽永の戰に西國へ赴きそれよりは音信不通。よしんば忍びて觀音へ參詣を致すにもせよ。詞出家法印の手に及ぶ彼にもあらず。搦捕らるゝ仔細あらばそれこそは武家の役。地出家には不相應。此儀を辭退申さん爲の參上と。憚る色なくの給ふにぞ。重忠不審の氣色ばみ岩永左衞門詞をすゝみ。いや是は秩父殿の御存じなき事某が存じ付き。元より御坊は景清が檀那寺。心を許し參詣せまいものでなし。地色所を瞞すに手なしとやら搦捕つて出されなば。褒美は一廉お寺の爲と存ずるからと。言はせも果てずこは怪しからぬ致連の御仰せ。詞我が眞言の密法は。五輪種子周遍法界鬼畜人天。皆是大日と說かれて。地廣大無邊の大慈大悲。景清來つて我を賴まば一命にかけて匿ひは申すとも。搦捕つて出すなどとは耳に觸るゝも穢らはし。よしそれが曲事とて沒收せられば傘一本。沙門の身に厭はぬ事と詞を放つて申さるれば。岩永も言いかねヤアねちくさい老僧。詞大日やら大熱やらそれは存ぜず。景清が居持ちだて後日にきつと沙汰に及ばん。既に以て近い手本は五條坂の遊君。阿古屋といふ女を六波羅に引出し。景清が在所を尋ぬる毎日の拷問。昨日は拙者が承り今日は是なる重忠の當番。家來どもに言付け憂目を見するといふ事京中に隱れなく。則ち其松を阿古屋の松と。異名まで付ける程の大詮議知られぬといふ事あるまい。事によらば法師の身とて拷問せまいものでなし。地色瀧坊を引きかへ鬱き坊にしてくれん。ヤア由ないお坊にかゝつて御用どもを忘るとさしたる事もなけれども。仕舞ひ付かねば座を立つてフシ次の一間に入りにける。重忠法印を近く招き。詞景清が詮議の事。重忠が胸中口外に出さぬ事ながら。貴僧は格別明かし申さん。平家の方にも誰彼と名ある弓取は多き中に。かの景清は一人當千あつたらしき武士。縱ひ搦捕ればとて無下に一命を斷つべきや。何とぞ彼が心を和らめ源氏の幕下に付け置かば。勇者の刪を日本に永く殘さん國の寶。臥龍

先生が孟獲を七度まで助け返し。終には蜀の味方となしつる。地色例をまねぶ寸志の忠義景清稀に入り來らば。この道理を演説あつて源氏に仕へ存命せよと。諫めの教へはお僧の役必ず頼み存ずると。敬ひ深くの給ふにぞ蟲御坊はつと感じ。今に初めぬ秩父殿の仁愛。一見阿字の佛教も外ならず覺え候と。歡喜の領掌なし給ひ。はや御暇と沒義道に。出家氣質の濁りなき オクリ清水。さして歸らるゝ。秩父の郎黨榛澤六郎成清。遊君阿古屋を拷問の時刻も限る未の刻。六波羅より立歸り御門におろす四人駕籠。簾を上げて引出す。姿は伊達の襠や。縛の繩引き替へて縫ひの模様の糸結び。長地小褄取る手も儘なれど胸はほどけぬ思ひの色形は派手に。氣はしをれ。筒に生けたる牡丹花の。ッシ水上げ兼ぬる風情なり。榛澤六郎御前に出で。詞仰せに任せ繩を赦し。さまざま宥め不便を加へ尋ね問ひ候へども。何分景清が行方存ぜぬとばかり。地色外に申し口も是なき故召連れて候と。披露半に岩永左衛門つか〳〵と立出で。詞ヤア無念なり榛澤。科人に繩もかけず。其上見れば拷問に疲れたる氣色も見えぬがエ聞えた。扨は御邊が今日の拷問生温くやられしな。よい〳〵明日は拙者が受取り。さう〳〵家來任せにもなるまじ。自身の手並見せつけ。景清が在所ほざかして見せう。侍どもやいあの女め 地岩永が屋敷へ引けと。例の粗忽を重忠押しとめいや先づ待たれよ岩永。詞細を赦し拷問をゆるめしも。榛澤が私ならず某が了簡。其上に今日の暮迄は此方の計ひ其許のお構ひない筈。入らぬ世話御無用〳〵。とりややい阿古屋。今日もまだ白狀せぬ由はて扨しぶとい何故言はぬ。さりながらそれもなあ無理とは思はぬ。義理と情を表に立つるが遊君の習ひ。いかに責めらるゝが辛いとて。馴染を重ねた夫の行方ついおうとも明かされまいさ。さなきだに流れを立つる女は。誠なき者と一向に心得し輩もあれば。それらが譏もうたてく思ひ。又は

同じ憂きふしを勤める。友傍輩の顔汚しなどゝ思うての事ならんが。爰をとくと合點せよ。景清が行方。存ずべき者なればこそ搦捕つて詮議もする。有様に白狀すれば。忝くも鎌倉殿の御意を安んじ奉り天晴の御奉公。萬人の譏を受けても君一人の心に叶はゞ。其身の冥加悪しからまじ爰をよく辨へて。サアさつぱりと景清が在所。地色此重忠に聞かせいと物和らかに理を貴めて。然も應ゆる詮議の詞。阿古屋は聞いてさつても嚴しい殿様。詞四相を悟る御方とは常々噂に聞いたれど。なんの仔細らしい四相の五相の。小袖にとめる伽羅ぢや迄と仇口に言ひ流せしが。今日の仰せに我が折れた。勤めの身の心を汲んで忝いおつしやり様何々の誓文で。景清殿の行方知つてさへゐるならお心に袴され。ついぽんと言うて退けうが何をいうても知らぬが眞實。それとても疑ひ晴れずばハテいつ迄も責められうわいな。地色責められるゝが勤めの代り。お前方も糟出してお責めなさるが身のお勤め。勤めといふ字に二つはないア浮世ではあるぞいなと。言ふに側から堪へぬ岩永。ヤアべり〳〵とはつしやいだ頃骨。詞是非白狀をせぬに於ては。此間の拷問に品をかへて憂目を見する。聞けば汝は懐胎とな。よい〳〵きつと思ひついた。地色腹に子のあるかさみの格鹽煎責にしてくれうと。威しかくれば。ハ、、、、。詞そんな事怖がつて苦界が片時なら

うかいな。同じ樣に座に並んで。殿樣顏してごされども意氣方は雪と墨。重忠樣の計ひとて榛澤樣の今日の詮議。繩もかけず責めもなく六波羅の松蔭にて。物ひそやかに義理づくめ樣々と勞りて。サア景淸が行方はと問はれし時の其苦しさ。地色水責火責は堪へうが情と義理とに拉がれては。此骨々も碎くる思ひそれ程切ない事ながら。知らぬ事は是非もなし此上のお情には。いつそ殺して下さんせとスエテとんと投出す身の覺悟。フシ持餘してぞ見えにける。重忠榛澤を近く召され。詞斯程心を盡せども。誠を明かさぬ上からは目通りで拷問せん。地色それ〳〵と仰せある詞の尾につく岩永左衞門。詞やあ〳〵者ども。阿古屋めに水喰らはす用意々々と呼ばはるにぞ。地あつと答へて白洲の內直す梯子を見るにさへ。心は上る枕の橫槌。庭の傍の井戸屋形深くもきしる縄車の。胸にひゞきて氣を冷す。阿古屋が心の濁り水スエテ今しも呑むやと覺悟の體。重忠庭に下立ちて。詞ア、仰々し鎭まれ〳〵。阿古屋を拷問の責め道具は。某かねて拵へ置いたり。地色誰かある持參せよと仰せに隨ひ持出づるは。いとも優しき玉琴に三味線胡弓取添へて。音締もさぞと白洲なる。フシ阿古屋が前に並べ置く。岩永もぎよつとせしが樣子如何と打守れば。詞これさ女。其琴彈け。重忠が地これにて聞くと刀を杖に頤もたせ。岩永殿もお聞きあれと。打俯けてフシ見えければ。詞こりや何ぢや興がるは。責め道具責め道具と何ぞ戲しい事かと思へば。エ、聞えた。拷問に事寄せ自分の慰み氣晴しをやらるゝな。天下の政道を取捌く決斷所での琴三味線。神武以來無い圖なほたへ。實に誠世界の有樣。天に口無し人を以て言はしむとは今思ひ當つた。阿古屋めが懷胎。若しもや此子が女の子なら。琴でやぐわん〳〵三味線で。ア、何とやらと京中が諷ひしは此前表。地此上のばれついで。ちよ〳〵げ。なんどもよごさんしよがの。フシハ、ハ、、と朝弄す。地重忠耳にも入れ給は

ず。詞ヤレ阿古屋なぜ始めぬ。琴を彈かねば景清が在所を。地色言ひ明かす所存かと詞もしげき重忠の。底の心は知らねども是非なく向ふ爪琴の。行方を何と岩越すに絃も心も亂るゝばかり。聲も枯野の船ならでオクリかひなき。調べかき鳴らし。詞影といふも。月の緣。合清しと。いふも。月の緣。合かげ。清き。合名のみにて。映せど。袖に。宿らず。詞重忠耳を欹て給ひ。今彈ぜしは蕗組の唱歌を我が身の上に取り。景清が行方知らぬとな。まあ知らずんば知らぬにせよ。して景清と其方が馴れ初めしは何時の頃。如何なる事の緣により深い契りの仲とはなりしぞ。是は又思ひ寄らぬ變つた事のお尋ね。何事も昔となる恥かしい物語。地色平家の御代と時めく春馴れにし人は山鳥の。尾張の國よりながゝしき。野山を越て清水へ日毎々々の徒歩詣。詞下向にも參りにも道は變らぬ五條坂。互に顏を見知り合ひいつ近附きになるともなく。羽織の袖の綻びちよつと。時雨の傘お易い御用。雪の朝の煙草の火寒いにせめてお茶一服。地色それがかうじて酒一つ。こつちに思へばあちからもくどくは深い觀音經。普門品第二十五日の夜さ必ずと戲れの。詞を結ぶ名古屋帶をはりなければ初めもない。味な戀路と樂しみしに壽永の秋の風立ちて。須磨や明石の浦舟に漕ぎ放れ行く緣の切れ目。思ひ出すも癪の毒。アヽフシ疎ましと語りける。詞ヲヽさもあ



りなん情の道。聞屆けしが詮議は濟まぬ。此上は三味線彈けいエ、イ。いやさ此方の尋ぬる仔細を。地色聞かぬ内はいつ迄もと。猶望まるる三味線のどうなる事か知らねども。思ひ込んだる操の糸今更なんと鐵刀木。心の天柱引締めて。三上り唄翠帳紅閨に。枕ならぶる。床の内。合馴れし。合衾の。夜すがらも。合四つ門の。跡夢もなし。合さるにても我が夫の。合秋より先にかなら。合ずと。合あだし。合詞の。人心。合そなたの空よと眺むれど。それぞと問ひし。人もなし。合詞ヲウもうよいは三味線やめい。班女が閨のかこちぐさ絶えし契りの一節。時に取つての一興ながら言譯は暗い〳〵。西海の合戰に命を遁れ都に折々紛れ入る景清。そちは度々逢はうがな。平家御盛んの時だにも人に知られた景清が。五條坂の娼婦に。心を寄すると言はれては弓矢の恥と遠慮がち。殊更今は日蔭の身。私は元より河竹のあるが中にもつれない親方。目顏を忍ぶ格子の先。編笠越しに健にあつたかアイお前も無事にとたつた一口いふが互の。地比翼連理。さらばといふ間もない程にせはしない別路は。昔のきぬ〴〵引替へて木綿木綿と零落し。身の果哀れな物語。フシア、おはもじと差俯く。詞いか樣是は斯くもあらん。景清程の勇士なれども實に色は思案の外。思案の外。地どう思案仕直しても此通りでは濟まされぬ。それ胡弓すれすれ。あいと答へて氣は張弓歌は哀れを催せる。時の調子も相の山。合相の山吉野龍田の。花紅葉更科。越路の月雪も。合夢と。合覺めては跡もなし。あだし野の露鳥邊野の。煙は絶ゆる。相の山時しなき是が。浮世のナホスフシ誠なる。地誠を線す一曲に重忠ほとんど感に堪へ。阿古屋が拷問只今限り。景清が行方知らぬといふに偽り無き事見屆けたり。此上には樺ひなしと。仰せに阿古屋は忝け涙フシ盡きぬお禮を伏拜めば。詞ヤア〳〵重忠。白いとも黑いとも片付かぬ詮議を。阿古屋めに偽りなしとは地何を以て申さるゝ。この岩永は呑込まぬフシ不埒々々と言ひぼぐす。詞ヲ、其仔細言うて聞けん。皷は五聲に通ぜずと雖も。糸竹の調は五音四聲によく通じ直を以て調子とす。曲り偽る心を以て。此曲をなせる時は其音色亂れ狂ふ。就中此琴。音ある物の司として人の心を正しうし。邪を禁むると白虎通にも賞じ置きたり。爰を以て重忠が。女の心を引見る拷問。十三の絃筋に縛り搦めて琴柱にくゞめ。科の品々一より十まで斗爲吟ずるを僻事とは申されまじ。地色琴の形を竪に見れば漲り落つる瀧の水。其水をくれる心の水貫。三味線の二上りに氣を釣上ぐる天秤貫。胡弓の弓の矢幹貫。詞品をかへ

責むれどもいつかな亂るゝ音締もなく。調子も時も合の手の。秘曲を盡くす一節に地彼が誠は現れて。知らぬ事は知らぬに立つ。調べを紛して聞取つたる詮議の落着。此上にも不審ありやと道理に叶ひし詞の調べ。ぴんともしゃんとも岩永は。撥髪頭かくばかりフシ眞面目になるぞ心地よき。詞重忠重ねて。阿古屋が詮議落着と雖も。猶この上に某が尋ね問ふ仔細あり。隨分勞り屋敷へ引けと。地仰せを蒙むる榛澤六郎いざ阿古屋立ちませいと。伴ふ情數々の惠みを思ふ女心。有難う存じますと。詞につきぬフシ悅び涙。岩永は拍子もなく調子に乘らぬむつと面。秩父は宮商角徵羽の五つに叶ふ琴三味線。賢き例引いたりちよつかい。撥利生ある糸捌き直なる道の。三重へ言の葉や。佗びぬれば。フシ親慕ふ子の。片膝行。地身を立て兼ぬる音をぞ泣く。スエテ憂身を

こゝに岡崎の。フシ片邊。地井場の十藏一幸が老母を育む藁屋の軒母は何をか思ひ寢のかの唐土の顏回に。樂しみは似ぬ臂枕。世に交際ぬ氣散じは。引立つる戸の隙間より風のみ通ふばかりにて。フシ稀に言問ふ人もなし。憂きふしを。地身に添へ持ちし釣竿の。フシ暇ありげに。見ゆれども母の一人居氣遣ひと。心は急ぐ井場の十藏腰には畚の重たきを。足許輕く立歸り。詞ハア是は母人。いつにない晝寢なされしな。定めて妹が身の上を案じ寢の。夢程もお心休めは珍重々々。地此間に釣つた此鯉を調味して。御膳上げんと取出す。片足たらぬ俎板も元浪人の錆庖丁。棚からぐわつたり落ちたは何ぞ。其響きに目覺めて母は起上り。詞ヤア十藏戻つてか何として遲かしりぞ。阿古屋があの身になりしより講釋も打止め。一寸内を出ぬ人のたま〳〵の留守なれど。心細う待兼ねる今日は先づいづくへぞ。さればふと存じ付き釣に參りコレ御覽なされ。此鯉を二喉まで終に覺えぬ獵の利きやう。地是も母人御息災延命の徵と思へば。大分嬉しう存じますと聞いて不興し。詞何釣にいて其鯉取つたか。それが母が息災延命の徵か。是はまた十藏とも覺えぬ常さへ母が嫌ひの殺生。殊に阿古屋が今の苦しみ。人並に世を經る我ならば其處の祈り彼處の祈禱。生ある物の命を助け。慈悲善根の果でなりとも助けたい此時節。面白さうに釣どころぢやおぢやるまい。地色可愛や其鯉が和御前に釣られ俎板に乘る苦しみも。阿古屋は六波羅で責めらるゝ苦しみも。人と魚との名は違へど苦しむ所に二つない。詞鯉のお蔭で息災延命おりや厭でおぢやる。地年頃日頃の孝行も愛想もこそも盡き果てしと。身を捻ぢ背けて恨み顏。詞左樣に思召さばお叱

り御尤も千萬。全く慰みの釣殺生に候はず。阿古屋が事に頓著あり御忘れなされしか。今月今日は御誕生日。浪人の後も形の如く貧しき中に。尾頭のある鹽物なりとも調へ。地目出度うお盃頂戴致さぬ年もなし。殊に今年はは や七十二祝ひは申し納め。來年の今日は不定の世の中相變らず祝ひ奉らんと。此間心掛けれども遠慮で講釋は仕らず。詞雜魚一匹調へん價に盡き果て殺生とは存じながら。小鮒でも釣つて御肴にと存じたれば。御鱈の如く三年物の鯉二喉。鯉の鱗は三十六枚あると申す。二喉合はせて七十二枚の鱗。母の御年も七十二。都合目出度う是で母の誕生日を祝せよと。地八大龍王の賜物と嬉しく持つて歸りし。十藏も木石ならず詞には出さねども。たつた一人の妹が苦しみ。母の歎き悲しみが悲しかるまいかと思ひやつてたべ母人と。歎かば母の歎きぞとフシ泣かでこまゞ〳〵語りける。詞なう恥かしやサア十藏。早うその鯉料理して。母が誕生祝うてたべ。地悔しや叱つた詫言に。悲しい中でにこ〳〵と笑うて膳が戴きたい。雪の中の筍氷の魚。唐土人の孝行にも劣りはせぬぞやれ十藏。とは言ふものゝいぢらしげに鱗の數と我年と同い年。詞いかにしても殺されまい御身が出世も此鯉の。地龍門の瀧を登る如くあやかつて命助けてやりや。コレ此盃を斯う坐れば幸ひ蒔繪の鶴の料理。心ぞ祝ふ千代八千代親子目出たう盃せん。フシア、酒がなとありければ。詞ハア、詫言とは勿體ない。お心解くれば此上の大慶なし。地酒も則ち用意せりと奈の内より取出す。徳利に餘る悦び頓兎にも角にも御心に。背かぬを今日の御馳走。ヤ亭主方ま一人あると下屋に駈入り。羽織片手にあたふたばかりの食籠も。土盞にことの缺盃侘びしき中に假初めも。禮儀亂さぬ親と子のフシ昔の育ち奥ゆかし。詞ハア是はなつかしや。景清の御身にもらかせし羽織ならずや。されば共時申せしは。是を打掛け景清が孝行も一所と頼み置きたれば。此座に置けば是は景清。今日の壽亭主二人と思召し。先づ盃お取上げいざお酌仕らん。地日頃は聞し召されねど今日は半盞ハア、忝ない〳〵。酒は愁の箒と申せば暫らくもお氣晴らし。其お盃サア景清戴いて。直ぐに返進申さしめせといふも注ぐも形ばかり。さらば盃お取次肴は無くとも聟殿の盃。まあ錢の廻り程是は〳〵注ぐまいと。存じながら又半盞したり辭かには上らいで。誠に下戸の無意氣呑み直ぐに私御頂戴。手酌は恥のもの是御覽ぜと。さらりと波んでついと乾し憚りながら又返進。御酒は御氣根毎年誘ふお肴。今年缺かんも心がかり世上の聞

えも候へば。碓氷と聲低に。母は千代ませ〳〵と繰言を祝ひ諧の。面白の時代や。嘉例の肴めでたい〳〵。取りちやに母も一つ受け呑むことはならず是つけざし。ハア、是は有難いと戴き戴きずつと乾し。然らば御意に任せ盃は是まで。餘り御機嫌よいに付け近頃不孝な願ひなれども。申し上げて見ませうが。御聞分け下されと飛退つて手をつかへ。阿古屋が今度の苦しみは景清に緣を結んだる故。というて重々の大恩ある景清が行方知つてもいふまじ。まして存ぜねば責殺さるゝは案の内。私つく〳〵存ずるに阿古屋が腹はな是々と承る。いかな〳〵殺させては母も我も景清に。何と面を合はすべき。然れども力業には動かしも助けもならぬ。所を何の苦もなく助ける極上々の分別を極めしは。某阿古屋が責められしかの。阿古屋の松と京童の異名を付けし。六波羅の松の下にて腹十文文字にかつさばき。上總の七兵衛景清運命拙く。とても賴朝を討つこと叶はぬ故。腹切つて相果つるものなり如件などと。似つこらしく書置を殘し相果てば。ヤレ景清切腹する上は阿古屋に用なしと。命助かるのみならず京都鎌倉心をゆるせば。油斷を覗ひ景清殿易々と本懷を。達せられんは掌を見るが如し。一日切腹を急げば一日妹が苦患を助ける。疾つく申上げんと存ぜしかども親子一世の此世の別れ。せめて快よう御誕生日を祝ひ納めて後の事と。今日迄色にも出さず思ひ初めし其日より。一日を千日萬日とのつつそつつ待兼ねし。今日只今より誰か我に代つて勞り育み奉らん。尤も妹はありながら女の事。かた〳〵の手の落ちた樣に思召し。歎きが積つて御身のくづをれそれが高じて又妹が。悲しい目を見ようかと案じ續くれば身も世もあられず。悲しけれども始めから無い十藏ぢやと。思召し諦め不孝の罪を赦され。命のお暇下されば有難からんと跡いひさし。胸までぐつぐと突つかくる。涙知らせじ泣顏見せじと差俯向き壘に。喰ひつき願ひける。母は萎る氣色もなく。ヤレ其詞遲かつた十藏。今朝はいふか晩にはいふかと。毎日々々待兼ねて思ふには。心が付かぬかいや拔かる者でもないと心の内でとつおいつ。親子の中も侍に死ねと敎ゆるは恥もあり遠慮もあり。いつ言うてくれる事ぞやと。今まで和御前が立身出世を待つた樣に待兼ねし。母は誰がなうても飢ゑもせず凍えもせぬ。まして妹がゐるからは跡案じる事微塵もない。未練な心を殘さずとも潔よう腹切つて。景清の恩も報じ妹が命も助けてくれ。と言ふとて妹が助

けたさに死ねといふでは更々ない。箸折かゞみの眞實の我子兄弟。月日と力に暮せしもの。夜ばかりがよからうか晝ばかりでよからうか。夜晝があればこそ立つ世の中に老の身の可愛さに隔ては フシなけれども。詞妹が腹には男孫か女孫か。御身が爲には甥か姪か胤は景清の預り物。それ殺すまいばつかりに死ねといふ合點か。幸ひと其盃また歸る旅ならば母が飲んで差すべきが。再び戻らぬ死出の盃。地一つ飲んで母に差せ肴せんと立上り。胸と一所に踊る鯉を鉢に入れ。十藏が前にする。詞今死ぬる身に入らぬ話なれども物は聞いて置かう事。和御前が祖父様妾を緣につけ給ふ時。切腹人の今際には鯉の濱燒をする。飯櫃の蓋で給仕すること故實なり。聞いて置けと物語。地人の上でもある事か我が子の役に今立つた。この鯉の今日釣にかゝりしも思へば天の與へぞや。祝うて坐つて早う往て奇麗に死ね。さらば〳〵と目を閉ぢて フシ重ねて詞もなかりけり。詞ハア有難や望み叶ひし我が大慶。地死後の見苦しからぬ樣とてもの年にさつぱりと。自刺に月代仕らん。刺刀砥石はいづくにと尋ぬれば。詞ヲそれよからう。今生未來の晴の月代。母が刺つておませうぞサア髮揉みやれ。アこは冥加なや生々世々の御形見御辭退は仕らぬと。地盥取る間もありやなし走の水にさしかゝれば。長地母は末世の手本となれ武士の鑑と鏡立。砥石刺刀携へ出で。アミト磨ぐも。みがくも弓取を。地子に持つ親は皆これと思ひ流しの合せ水。スエテ今日別れては逢ふ事の。鐵より堅き合せ砥や。力なみだを押包む。袖よ袂よ手合せし。フシサア十藏とありければ。地思ひ亂るゝ黑髮をもんで鏡に打向ふ。母は後に立廻り。詞何と十藏。親が子供の髮剃はほんの月代。逆剃にせうかいの。アいや若いが先立つも老いたるが殘るも。此方こそ逆樣と存ずれども。地皆前生から定つた直剃になされ下されかし。ヲ、心得しと老の手の震ふを見せじ。震はじと二剃三剃顏と顏。フシ互に映る。鏡の内いやなう十藏。詞幾つになつても面影の殘るは昔の幼顏。あてにならぬは額の黑子。見通しの法印が六十八迄請合ひし其命。まだ半分も經たずこんな事があらうとは。神佛のなされた八卦にも間に嘘があるかいの。ハ、、、可笑い事ではあるわいの。いや私は八卦の合はぬをいかう嬉しう存じます。先年國許で御大病お煩ひなされた時。百人の醫者は百人陰陽師山伏名僧智識の占ひにも。御本腹と申す者は一人もなかりしが。御快氣に間もなく七十二迄御息災。此樣な目出度いことはござりませぬ。ヲ、言やれ

ばそれもさう。其時參つたら今日廣い國へ主づいて往きやる。地嬉しい月代は剃るまいもの。長生してこんな目に遭ふ。フシ目出度いぞや。地ヤ何かいふ間に時移る月代剃つて了はうと。詞ホヽこりや何時の間に揉み直しやつた。いや揉み直しは致しませぬ。でもひつたりと濡れてある。それはお前のあの嘘わいのおれが何の。微塵も泣きやせぬ／＼と地いふ聲曇る鏡の內。互に顏を見合せて笑ひを作る氣は立つる。老の手業のかよわきもフシ剃刀早に剃りなせり。詞是からは聟の景清殿大國の所知入。まさかの用を嗜みし地晴小袖召させんと取出す。心の闇の眞黑々縞隱れ行く伊達羽織。行長合ひてのつしりと。大小さすが浪人の昔かゞやく金作。十藏忽ち景清と。本フシ見かはすばかり見えにける。地物數いはゞ老人の若しや心も亂れんと門に出で。詞これ迄養育の御恩海に較ぶれば蒼海淺く。山に譬ふれば須彌山低しと申せども。命は又義によつて輕しといへり。妹が事は申すに及ばず申上げ度き數々は來世の事。日の內は淸水に暮し切腹は暮六つの。鐘を限つて逆樣な事ながら。御回向頼み奉ると言捨てつゝと走り行く。地色母は續いて走り出で。ヤレ暫し待て物言はう。おうい／＼呼べど答へず俤も。涙と年の疎き目に其行方は見えざりけり。あつと大地に伏轉び。鬼にもせよ蛇にもせよ死にに行く子を往て死ねと。歎かぬ親のあるべきか。女なれども侍の親に生れた身の因果。泣きたいを得泣かず理窟いうたり笑うたを。誠の心と思ひしか狂氣半分半分は死んで居たわやい。扮裝つた姿いつ忘れう。千騎二千騎の大將と仰いでも。不足ない子を可愛いや一生貧苦に埋らせ。鎧甲著せなんだが悲しい。いつそ不孝にあつたらば是程には思ふまい。孝行にしてくれたが今では結句恨めしいと。涙の限り聲限り。泣いては口說きフシ立つては轉び遣方。涙に伏沈む。地かゝる所へ榛澤六郎成淸。阿古屋を駕籠に勞り來り。詞ヤア／＼老母。阿古屋が身の上詮議落着致すによつて送り返さるゝ。併し胎內に子を宿せば平產迄は他國叶はず。男子出生ならば決斷所へ訴ふべし。女子に於ては構ひなしとの。地上意なるぞと阿古屋を引いて渡さるれば。なう悲しや母樣とスエテ縋り付いたる嬉し泣き。地母は仰天氣をうろたへヤア健で戻つたか。嬉しやの悲しやのこんな事知つたら遣るまいもの。六波羅はどつちぞまだ十藏が日は暮れまいか。ようち戻つてくれたな入相が死んだら何とせう。兄が鐘は鳴るまいかと何をいふやら氣もそゞろに。餘所にはならぬ暮六つを

フシ胸にごん〳〵〳〵つくばかり。地母様それは何おつしやる。いかいお世話六郎様へお禮〳〵と氣を付くれば。ほんにほんにと手を合せフシ伏拜むより外ぞなき。詞ヲ、久々にての對面狼狽ゆる程嬉しい筈。地阿古屋を渡せば他に用なしと六郎は。オクリ下部を。引具し立歸る。地母様悅びは道理ながら其樣に。なぜうろ〳〵なされます。詞うろ〳〵せいでは兄は腹切りに往たわやい。エイそりやまあどこへ地何としてと驚けば。詞そなたの命助けう方便。景清に成代つて六波羅の松の下。日の内は清水で暮し。入相の鐘と一時に腹切る筈。地ヤ斯ういうてはゐられぬと駈出してはどうど倒け。歎きに弱る足弱車阿古屋悲しさ遣方なく。詞戻ると其儘なぜ言うて下さんせぬ。地女の足でもつい一走りわしが往て暮れぬ内。兄樣連れまして立歸ると。はや駈出すおのが名の阿古屋の。松へと三重へ急ぎ行く。地色こゝに過ぎつる元暦元年源平の戰壇の浦にて。上總七兵衛景清に出逢ひ不覺を取りし源氏の侍。箕尾谷の四郎國時その身の恥辱を顧みて。陣所に歸らず直ぐに逐電してげるが。景清世に存らへ都にさまよふと聞きしより。鬱憤を遂げ弓矢の恥を雪がんと。在所を探す京巡り今日しも笑を尋ね來り。扇の端に書付けたる心覺え開き見て。詞ムウ岡崎の村外れ北を受けたる一軒屋。西に藪垣入口に井の字の印。地あるぞ〳〵と打頷きフシ内の樣子を窺へば。地主の老女が年恰好是こそとつつと入り。上り口に踞げ詞ヤア老女。阿古屋が母は汝よな。聖の景清屋島の浦にて。箕尾谷と軍物語聞及ばん。我こそ其箕尾谷四郎國時。景清が在所を探す。又鎌倉よりも詮議厳しく。秩父岩永が承せしともせぬとも取々の風説。それはともあれ汝が知らぬ事よもあるまじ。眞直に吐かせ。知らぬなどゝ地偽らば皺首捻ぢて言はせんと。威しかゝればきよつとして。いや知らぬとも存じたとも。兎角の返答呆れはてフシ顏を。詠めるばかりなり。地彼奴知つてとぼけるか。荒氣では行くまじと分別し面色を和らげ。詞老女こゝを合點せよ。此箕尾谷慘い心持つたれば。無體に連歸り人質に取り。景清が心を澁らせ聞出す仕樣もあり。又すつぱりと斬殺し。景清が姑の敵と名乘つて出る仕樣もあれど。科ない人を殺し卑怯を働く我ならず。地手近う言へば阿古屋殿と縁が切れ。退けば他人の景清身はくづをれうと隱し遂げうと。思ふは五十年先の氣質當世は川流れさらり〳〵。合點かお袋とフシ氣をゆるさせて哆しける。地ムウ、合せ物は難れ物言はしやればそこ

もある。當代は昔と違ひ。弟子の器量のあるなしも構はず。弓矢打物の大事さへ金次第で傳授するげな。詞氣のさばけた世ぢやどざらぬか。水心あれば魚心あり。問ひやうに心あれば教へやうにも心が。ありさうなものゝ樣に地思はるゝぢやどざらぬかと。詞の謎をとく呑込み路銀の財布取出す。じつと尻目にかけながら フシ猶見ぬ顔の空とぼけ。詞いやなうお袋知らぬ所へ初めて參り。踏荒し煙草を荒し忝いと。地一包み膝元にそつと置く。苦もなく取つて指先に捻つて見。誠に是は茶の金さうな敲く程の重みでもなし。コレ人の在所を訴人すれば。詞屬托の大法さへ判金七枚に極つた世の中。茶の錢ばかりなぜ極らぬでどざるぞいの。地おつと茶の金呑込んだ。コレ判金七枚と財布の包み取出し。前に並ぶる折こそあれ。阿古屋十藏に尋ね逢ひ互の悦びいそ〳〵と。立歸る庵の内見馴れぬ武士に見馴れぬ小判。こはいかにと迂濶に兄妹得はいらず フシ内の樣子を窺ひける。地箕尾谷悦びサア望みの如く此金を渡す上は。詞景清が在所を知らせ我に討たせ。此箕尾谷が願ひ叶へてくれ。ヲヽ神佛より貰い金を。大分取るからは教へませいで何とせう。上總の七兵衞景清が在所は。地美にありと十藏大音聲に呼ばはつて駈入り。詞ヤア珍らしゝ箕尾谷。見忘れしか壇の浦にて見參せし景清。汝弓矢の恥を思ひ付狙ふとは疾く聞いたり。今巡り逢ふは優曇華。髑髏を晴らせ相手になつて得さすべし。サア抜け勝負と詰寄つたり。地敵に詞をかけられて箕尾谷なじかは臆すべき。拔放さんとはしつれども壇の浦の戰は。互の姿甲冑の昔に變る姿形。それかあらぬか訝しとためらふ氣色十藏苛つて。詞ヤア臆れしか箕尾谷。又臆病が起りしな。地性根を付けてくれんずとひらりと拔いて打ちかくる。母も阿古屋も心くれ スエナわつと叫び泣くばかり。地兩方互に秘術を盡し打つぞと見えし十藏が。刀の金や冴えたりけん。鍔元よりフシぽつきと折れて飛散つたり。地十藏柄をからりと捨て景清が運命これ迄なり。サア首打てと差しのぶれば。ヲヲ神妙なり景清と振上ぐる刀の下。眼を閉ぢたる面魂つく〴〵と打守り。詞ムウウ主君の仇を報ぜんと。鎌倉殿を狙ふ景清。刀が折れたらば差添へもあり。命の懸換もある樣に首差しのべしは。ムウムウいや〳〵いや。箕尾谷が一腰は。正眞の景清が首を打たでは叶はぬ刀。紛れ者には得汚すまいと鞘に納め。地おのれ景清もう取置けと一分別あるその有樣。フシ一器量ある男子なり。地母は手を打ちヲヲよい分別や眼力や。詞其男は十藏といい

ふ我が息子。誠の七兵衛景清が隠れ住む所は。清水の後堂より本堂へこれ斯う廻る。地左の方と折つたる刀おつ取つてぐつと突込む乳の下かけて引廻す。悲しや是はと驚き騒ぎそも何故の御自害と。兄妹縋り取付ければこは〳〵いかにと箕尾谷もッシ呆れ果てたるばかりなり。地母は苦しき息ながらやれ兄妹よ。詞其金を路銀にして。景清の在所を尋ねに母が命のある内にちやつと往け〳〵。ア、嬉しやまんまと仕果せた。地斯ういたら箕尾谷殿さぞやさぞ憎からう。身を切り刻み砕かれても。もとより知らぬ景清の在所教へうと偽りしは。兄妹を尋ねにやる路銀に金取らう大騙大盗人。あの婆々めずたずたにもと思召さうが。かはいうて〳〵どうもならぬ。子供の爲聟の爲騙になつて死ぬる母が心。子を持つて後思ひやり其時恨みを晴れてたべ。詞ヤア兄妹よ。千日千夜言うても名殘は盡きねど皆仇言。地構へて〳〵て心を合せ景清を見立てゝくれ。是をいうて仕舞へば心にかゝる事浮世にないと。詞は涼しく心は弱る息も切れ。ッシ此世の別れと消え果つる。地色阿古屋は更に夢現。辨へ知らず取亂しスエナわつとばかりに伏沈む。地十藏は箕尾谷に泣顏包むはぢ紅葉。胸は時雨よ雨やさめ岩木ならねど箕尾谷も。敵は敵金は金死なずとも是しきに。了簡もあるべきを不便の母が最期やとッシ餘所目遣ひぞ頼もしき。地やゝあつて十藏金おつ取り。物をもいはず箕尾谷が前に置く。詞ヲ、返辨の心尤もなり。此上はやるといふとも地よも受けまじと立つて死骸の前に置き。詞七日々々の弔ひ金七々四十九兩の香典。死人に手向ける上からは禮を受けうやうもなし。地恩にもきせぬ來世金受け悅んで成佛あれ。さて某は參り申すと立出づるヤア〳〵箕尾谷。詞母に手向けの情はあれども景清を狙ふ御邊なれば。此十藏いつまでも妨げ入れる合點か。ヲヲ言ふにや及ぶ老母が愛心に免じ狙ふまじ討つまじと言ひたけれども。我も根井の太夫といふ親あり。我故江州に蟄居の身。景清を討つて會稽の恥を雪がずんば。地孝行も武道も立ち難し。汝等兄妹景清に巡り逢はゞ。斯く付狙ふと言聞かせ必ず用心怠るな。詞ヲ、サ十藏が面をとつくと見置き人違へして悔むなよ。何さ何さ千體佛程あるとても。一念の眼力誠の景清討つて見せうぞ。見事討つかおのれ見事妨げるかと。地思はず兩方反打つて詰めかくる。阿古屋立出で互に宥め宥められッシ別れ出づるも。止まるも共に甲斐なき箒木の。ありとは見えて亡き骸を古い墓籠に法の道。心は網代の蓑禮輿と兄が歎けば妹は。まそつと貧しい野送りでも

燈籠なりともあるものをと。くらむ心の燈火を法の光にかき立てゝ。泣く〳〵荷ひ諸聲に爾時無盡意菩薩。卽從座起偏袒右肩合掌向佛而作是言世尊觀世音菩薩大慈大悲を引導に。此世を離れ行く旅と人を尋ねに行く旅と道は。二筋變れども。涙は一つ一筋の誠の。道こそ知るべなれ。

第四　道行旅寢の添乳歌

巷木のありとは見えて。逢はぬとは代々の詠の。種なれど。我が身一つはつれなきと。思ふ心の松の名や世にも阿古屋が夫思ひ。勤めの中の誠より。うけし胤の稚櫻。初の子持の甲斐性なき。姿を人の識り草。さがなきロもおのづから七十五日はや立ちて。今日忌明の壽や。產神詣にかこつけて。よそのへ人を。尋ね行く目當は長の。旅なれど。つい菅笠に草履がけ。案じよりもやす〳〵と。長塩思へば輕き三條の橋も後に遠ざかり京の名殘と見返れば。跡に追着く十藏が。日傘片手に振鼓。まだ玩び。知らぬ子に甘やかしたる叔父樣とたが。ひに笑ひ栗田山。越えてぞ爰に。追分や大津繪召せと旅人の。心を暫し繫ぐにぞ。小オクリさして。惜しまぬ膳所の町瀨田の長橋。かゝる身の重き思ひを。祈れとや。其方に立てる石山寺。南無觀世音菩薩。大慈大悲の惠みにて。刄に沈む母上の。歿未來の闇も晴渡り。眞如の月の彼の岸に向はせ。給へと伏拜む。袖も露けき。春の野におのが在所を知れよとて。妻戀ふ聲はけん〳〵ほろろ。子を思ふ身はねん〳〵ころゝ。泣くなな泣いそ我が懷に。遲々たる春の日。影を受けて。育て上げなん乳母が餅。草津を早く出離れて。右と左へ二筋の。冷泉道は。別れし。我が夫も。近江とばかりしら眞弓。いづくを指して行きなんと。案じ迷ふもフシ道理なる。十藏ふつと思ひつきまだ幼なき嬰兒の。心は正直正路にて。神や佛の惠みにも。本フシ叶ふ御籤の草結び。辻占問はんと立寄りて。心に右を尋ぬれば。顏を自然と背けたる。冠たいこのよしなしと。又問うて見る左の道。につと笑顏の鏡の山。セツユリ映る心にまか。せんとフシ行く道もせは。初花の吹雪も深くもり山の。梢殘らず色めきていとしをらしき。里の若嫁。小娘たちが。春の物とて流行唄。三下リ唄唐も大和も。鄙も都も濡れの沙汰サヨエ。合えゝ優し。ちんないろ〳〵ヲヽヲ、粹や〳〵。合宿はヨエ鏡の。男の子和女郎が口よすだんかうサヨエナホス塩愛知川。越えてフシ高宮の。町に鳥居の二柱。お多賀石神の杜繁み。遙かそなたと額づきて夫の命長かれと。守袋をかけまくも。忝なしと木綿著の。鳥

本の宿。櫓橋渡り〳〵て見上ぐれば。雲を縫ひ行く磨針の峠。はるかに夕霞。旅の心の忙がしさ一人打つたり舞うたりの。合川を過ぎ行く長縄手。立つ辻堂を目當にて辿り。行く身の三蓮へ便りなき

■二上り住吉の橋の反つたは大工からかや木からか。木を削り鉋かくれば鉋からかも知らぬえ。ヲシ知らぬ田舎も。住めば又。地色我身一つの都ぞと心の急ぎ延ばし置く。惡七兵衛景清が人に不審を打たれじと。普請通ひに身を窶す。在所大工の仲間に入り。背高々〻と異名を呼ばれ。流れ渡りの手間仕事今日も傍輩打連れだち。普請場をはや申の刻暮るゝに遲き春の日の。フシぶら〳〵かしこに立歸る。詞ヤアたつた今迄くわん〳〵した空であつたが。エ。聞えた。狐の嫁入のそばえ雨。地晴らして往かうと辻堂に立寄る內の高話。中に頭と思しきが張肱構へ分別顏。詞おらが出入の仕事旦那。根井の太夫大彌太樣。お名が大彌太といふに依つて滅多やたの大屋敷。此度の御普請は鎌倉の頼朝樣がお腰掛けうとおつしやる故。物入り構はぬ結構づくめ正眞の大名普請。皆も隨分精出しやれ。手間賃は儲け次第。ナウ背高さうぢやないか。いかも此方の言はしやる通りだや扨あの根井の太夫殿はどう見ても阿呆ぢや。それをなぜと言ふに。鎌倉の頼朝樣がお腰掛けうとおつしやるなら。つい上り口を一間程普請して濟む事。地それも喧しいに床几一脚當てがうたら。ゆつくり腰は掛けらるゝに。いかに金が澤山なとてあた費な大普請。詞但し頼朝樣のござるといふは世間への言觸らしで。あの內にござる娘御に聟殿取つて御祝言。地その晴れの普請ぢやないかと餘所ながらうら問へば。詞ハテ文盲な。お腰掛けらるゝと言うて常體の人間とは違うて。頭さへ大きい頼朝樣。腰の廻りは思ひやらるゝでつかちない物であらう。地此樣なことで普請がなけりやこちとが仲間も立たぬてや。詞したがまあ悦びやれ。奈良の大佛は建立なる。是から段々興福寺の元興寺のと。大工の秋が入つて來る近年にない摑み取り。是といふも番匠の始り太子樣のお蔭。この度七堂伽藍修復につき。大工仲間一統に手間を御寄進申すが。めいめいの冥加の爲。一年に六日づつ頭役に廻つてくる。地おら等が番に當つたら戻る土產は名物の。干蕪買うて來うと フシ笑ひもどつと晴れ渡る。雨の足もと。地弱々と旅に阿古屋が兄妹づれ。濡れみ乾きみ菅笠の辻堂にさしかゝれば。互に見合す顏と顏。景清ちやくとエヘン〳〵。詞はあ旅のお衆さうなが 地雨に逢うてさぞ御難儀。まあ爰でゆるりつと日の暮る

る迄休んでござれ。お連もせかずと〳〵と目で知らすれば呑込む十藏。詞お詞に甘へて申兼ねた事なれども。火打があらばお貸し下され一服吸付け申したし。いやいや。火打は持ちませぬがよい事を存じ付いた。地幸ひ有合ふ檜の切。雖揉みにして進ぜうと。フシ道具箱あぜかへせば。地傍輩ども口々に。詞いや背高めが煙草の火で旅の女中こまづける。あの抱いた子が目に見えぬか。歴とした男を鼻の先に置きながら。ふづくりかける大膽。地猫の御器へお見舞申す鼠ぢや迄。それ〳〵猫で思ひ出した口あいてゐる蚶へ。ほでぼしを突込んで迷惑するを見るやうな。構はずと置いて來いと。オクリ笑うて。皆々立歸る。地跡は三人詞も口々。ヤア是は無事で健固でよう健でゐて下さんしたと。阿古屋は夫に。フシ縋り付き誓し。涙にくれけるが。詞なう此様に巡り合ひ。御無事なお顔いつか見ようとたつた今迄案ぜしに。地是といふも年頃日頃觀音様を念じた驗。一つはいかい兄様のお世話の甲斐で嬰兒まで產み。親子兄妹一所へ寄るに付けても母様のと。詞を殘すフシ疊り聲。地景清外は耳にも入らず。年寄られたる母人。同道なきは第一の氣懸り。詞して〳〵仔細は十藏殿。されば〳〵。我が母女には稀なる最期。いやもう是は順の道。地仔細は阿古屋にゆる〳〵と御聞きあれと。フシ愁ひを餘所にくろむれば。地景清ははあハツト膝を打つて。詞エ、殘念。某日陰の身ならずば。都にある内對面とげ。地聟姑の御盃せめて戴くものならば。是程には思ふまじとスエテ男。涙の繰言に。阿古屋も今更十藏も盡きぬ歎きを押隱し。詞扨まあ何から申さうやら。雖儀の内の悦びと阿古屋が平產。あたり近所の介抱にて漸とすくだゝせ。產神詣と僞り京はずいと脫けたれど。地貴方の行方近江とばかりどこを前途と思ひしに。不思議にも翹迂ふ天道の御惠み。此上の珍重は愛らしう生れた此子。手渡し申すが我等の土產。指似を置いて來たは其許の細工の業。アレあの様ににこ〳〵と。笑ふ程に育て上げたは伯父が自慢。是ばかりは恩にきて貰はにやならぬとフシ笑うて見すれば。地其許への御禮景清が口では申さぬ斯くの通りと。スエテ頭を下げ手をつかへ。詞さて出來したは阿古屋が心底。六波羅へ引出され拷問に逢ふぞとは。人の噂に聞きつれども心に悔むばかりにて。憂目を救ふ仕覺もなく。無念の月日を暮せしが。地色今日只今めぐり逢ふは操の德。天晴貞節過分々々。なう其お詞たつた一つ聞かうばかりの辛抱。連添ふ女房に過分とは勿體なや忝なや。此子も心に悅ぶやら乳うまさうに呑んでゐる。

顔見てやつて下さんせと（フシ）いふぞ妹脊の誠なる。（地）景清重ねて是なら聞かれよ。（詞）某が日頃の願望追つ付け成就の幸ひあり。この長濱の片邊。根井の太夫大彌太が隠居屋敷へ。源頼朝上洛の次手に立寄らんとの風説。聞くと等しく飛立つばかり。何とぞ根井が普請に入込み。事の様子を窺はんと思ひ付くより俄か大工。（地）すうきを以て此程より毎日普請に雇はるゝは。身の幸ひと悦ぶ矢先。方々にめぐり逢ふも不思議の吉相。思ひ込んだる念を以て根井が館の案内覺え。易々狙ひ頼朝が首取つて平家に手向けん。コレ七兵衛が積り普請塾み込んだる胸の一闘（フシ）氣遣ひあるなと語るにぞ。（地）ヲ、潔よし頼もしゝそれに付けて十藏が。一つの計畧思ひ付きたり。（詞）是より某東國へ赴き。頼朝が上洛の道中へ出會し。悪七兵衛景清と名乘つて狼藉に及びなば。供先守護の大小名我。討取らんは必定。景清亡びしと頼朝も心をゆるし。根井が館に入り來らん所を狙ふ誠の景清。（地）本望を遂げ給はゞ繋がる縁の某まで。共に高名の數に入り武士の大慶是に過ぎじ。阿古屋を御身に渡す上は。兎角の噂際費え是より直ぐに罷り立つ。妹さらば景清おさらば。（詞）ア、天晴れの志身を捨てゝの親切。（地色）此上は止むるとも留まらぬ氣質の十藏殿。旅立の餞せんと道具箱の底よりも。隠し置きたる一腰取出し。（詞）田舎大工の七兵衛が嗜み道具の段平物。（地）鎌倉表の普請の晴れ差いてござれと差出せば。（詞）忝なしと押戴き。腰にぽつ込む（フシ）讓りの道具。細工は流々侍の名を。（地）萬天に上げ普請勇む。心の内普請（フシ）追付け手柄を立揃へ。家渡粥の豆の數喰ひ當て。嚙み當て。高名せんと心も似れば形も似る。二人が姿縁の蔓。瓜を二つの景清十藏立別れ。てぞ（三重）〈行水の。（地）小波の國とも詠みし近津海。所の名さへ長濱と御代を祝ひし家造。主の心廣庭に。移し植ゑたる糸櫻（フシ）今を盛りと堅りし。（地）根井の太夫大彌太が隠居といへど古の。氣質は矮る大名普請。數々多き作事の内圍ひは主の物數奇とて。物に念者の根井の太夫腰元婢に手傳はせ。手づから結ぶ壁下地。（詞）ヲ、ヲ、是で葭簀。こゝへ一本青青と此竹。節の付きやうが至極々々。（地）こりや出來た面白いと。機嫌にこ〳〵蔵繩。しやんと結んでふつつり鎌。既に指をやらうとしたと差置けば口々に。（詞）遊ばしつけぬ下々の手業。お慰みとはいひながらお怪我があつては。お姫様のお氣もじりう是でお仕舞ひ遊ばせ。ムウわいらが事の道理を知らぬに依つてさ。此度の普請はな。忝くも鎌倉殿御上洛の御序。此爺が隠居へお腰掛けらる有難さ。壁下

地でも自身にするが。せめてもの饗應。地もちつとぢや手傳へと。また言付ける主命に。否とも伊達羅携へて。フシ辛氣篠竹。斑竹。纏ふ葛の永き日も。はや九つか普請場の。拍子木かち〳〵畫休み槌も。手斧も靜まれば。詞ム、ウ普請小屋の畫食時分な。晩迄もかゝらうと思うた此窓。半日には捗いき〳〵。さて此壁はどの左官めに言付けうぞ。地色數寄屋の上塗晴れの物と獨り呟く目通りへ。小腰かゞめて慮外ながら。此壁を塗らんず者拙者ならで外になしと。鏝閃し透見口フシ壁訴訟とぞ見えにける。在合ふ女中笑止がりこれ〳〵壁塗り。詞殿樣のお側近う。頭巾も取らず憚り千萬下りや〳〵。ハ、アさすが女中とて物の作法知らずぢやな。若衆の紫帽子嫁御寮の綿帽子虚無僧の編笠。左官の頭巾は脱ぐが不躾脱がぬが禮儀でござりますと。いふに大彌太打頷き是はさもあらん事。して其方は此間に見馴れぬ者ぢやが。今日初めての左官か。得て汝樣なひやうげ者はロばつかりで細工はあか下手。圍の上塗合點がいかぬ。是はお情ない御一言。正眞の口もロ手も手と申すは拙者が事。先づ御細工の助枝窓。見た所が地黄丸屋の看板形水のへりによどさりましよ。葭簀の模樣は崩れ格子。この取合ひにはあつさりと淺黄か桔梗か丁字茶か。地梨梅花色濃鼠と。いひ並ぶれば默りをろ姦しい。普請もいまだ滿てぬ内崩れ格子とは忌々しい。あいつ明日から寄せなといへと。以ての外の不機嫌に。言はれぬ數寄屋の壁塗ろより。畫飯の白壁とぽつたが百貫增しと。フシ左官は不首尾に内に入る。大彌太元より昔人只管氣にやかゝりけん。詞ヤイ女郎めら。此窓打毀つてしまへ。地早〳〵と叱りの聲フシ奥へ洩れてや。娘の白梅する〳〵と立出で。詞何事をお氣に違ひ父樣にお腹立てさせます。是といふも自らがお側にゐなんだ第一の誤り。地樣子は知らねど御機嫌直され。お食の御膳氣を變へて私が部屋の庭の躑躅。咲いたもあれば咲かぬのもあるが一種の御看。酒事初めてお遊びとフシ物和らかに詫ぶるにぞ。子に袢さるゝ親心。顏色直してヲ、そりや氣が變つてよろしからう。詞總じて心にかかる事は祝ひ直しが大事のもの。いやそれに就いて思ひ出した。數多入り來る大工の中。人に勝れて脊の高い男め。つくづく見るに細工の手早さ。萬事物馴れた奴と見た其奴呼べ。此窓の祝儀祝ひ直させ。快よう酒飲まう其大工呼んで來よ。地色はつと答へる返事の内お召しなさるゝ脊高めは。私でござりますと出合ひ頭の拍子ようフシ鉢卷取つて蹲くばあれ見たか白梅。先づおつ取つて機轉利きこり

や脊高。近う寄れ。其方が育ちから都の生れと目利きしたが。此近江へはなぜに來た。是は有難いお尋ね。もと私は飛驒の國の出生。幼少の時分より五畿内を經回りて。去年より此お國へ引越して參りしが。此度の御普請は。頼朝樣のお成りとやらお出でとやら。其御造作に雇はるるは大工冥加に叶うた有難い事と存じて。微塵のらを仕らず一服喫む煙草を半服に減じて一無盡に精出しまするれば。地其御褒美に作料は。五人前づつ御拜領フシ頼み上ぐると願ひける。詞成程々々其方がいふ通り。忝くも鎌倉殿。御光臨あるべきと仰せ下さる有難さ。過ぎし頃鶴ケ岡の八幡宮。御造營の御時忝くも頼朝公。氏神への御馳走とて。御手づから石を運び砂を持ち壇かづらを築き給ふ。其例を思つてな。身も手づからの下地窓を差別も知らぬ左官めがむだ口。いかにしても心にかゝる祝ひ直してくれまいか。是は是はお易い御用。鶴ケ岡の緣につれて。此窓は龜の形萬年の齡にて。内の葭簀は吹寄せ格子富貴を寄せるといふ心。地色お庭の花は糸櫻結びを長う頭をうなだれ下下が。靡き隨ふ貫盛。お目出度う存じますと祝儀を述ぶれば出來た〳〵こりや嬉しい。ヤレ女子ども此大工。勝手へ伴ひ料理喰はせ酒飲ませい。身も畫寢酒過ごさう。白梅來よと打連れてフシほたノ〳〵悦び奥に入る。サア御意の出た大事のお客殿樣の御機嫌の。歪を直す大工殿つゞくり普請の名人と。女中のおどけ賑々しき オクリ臺所。へぞ通りけるフシ憂しと見し。昔を今は慕ひ草。世を忍ぶ草しげる身の オクリ憂きが。中にも妻や子を心一つの寶の玉。長地阿古屋が名のみ甲斐もなく辛き世帶を鹽鱈と子持姿に古への。派手をくろめるお方振り。畫間の辨當夫の爲。フシ運ぶ心ぞ誠なる。音請小屋差覗き細工場をまだ仕舞はずかと。奥を見入つて親ふ内。お臺所の御馳走に顔の日和もよい機嫌。いそ〳〵と出て來るはコレこちの人ぢやないかいの。ム、女房どもか。地坊かよう來たなあと手を取りて。詞是は是はきつい熱丸子でも呑ましたか。此樣な事なら畫飯持つて來るには及ばぬ。地色子の育て樣が大凡な。以來をきつと嗜め嗜め。詞なうひよんな事いふお人。どの樣な寶にも替へまいと思うて。育て上げる女夫が樂しみ粗末にするとはなけれども。地色廣い世界を狹う暮し大事を抱へた主のお身。大工の稼業は是非もなく朝内を出しましても。どうか斯うかと案じられ畫の日脚を待兼ねて。辨當急ぐもフシ顔見たさ。サア機嫌よう參つてと風呂敷包み取出せば。詞いや〳〵今日は畫飯入らぬ。思ひがけもない事が殿樣の御意に

入り。お臺所へお召しなされ結構なお振舞ひ。諸白を引受け〳〵近年の菜糰。地こちとが内のたんぼ酒賣場の塵とは違うたものと。いふ顔つれ〳〵打守り。いとしぼや時世とて心も詞も品下り。昔には似ても似付かぬ姿形。思ひ出せば フシ味きなや。人々多い其中に御一門の用ひも強く。酒宴亂舞の座敷にも肩を並べ膝を組み。さも羨まれたりし身の。ほんに麒麟も老いぬれば駑馬に劣るといふ譬へ。人に手を下げ機嫌を取り僅かの酒を貴がり。諸白の賣場のと昔は夢にも言はぬ詞。覺えさしやつたフシ悲しさと思はず。かこつ憂き涙。詞ヤイこりや何を馬鹿つくす。人に以前を芳しがらそと。男の外閉繕ひの潛上置いてくれ。假令誰も聞かねばこそ。地色むだ口やめて早う去ね道でお尻を抓られなと。おどけに紛らし目遣ひの。去ねよ〳〵に女房は フシ娘を抱いて立歸る。地奥より主の聲として。最前の大工それにゐるか。脊富。脊高と呼びかけて庭に出づればハツ是は殿樣。御用如何と畏る。詞最前女子どもへ言付けた。御殿へ見越す倉の窓の目塞ぎ。いかにしても鬱陶しい。成程その儀は御意の趣お臺所で承る。申さば僅かのはした仕事明朝でも致しましよ。いや〳〵。年寄りは氣がいらつ今日中にしまつてくれい。地色其儀なら只今と形に似合はぬ尻輕き。かしこに置いたる道具箱しやんと擔げて脚代の。ナニの梯子大またげ。のぼる大工はさもなくて見上ぐる老の危ながり。心ぐれつく丸太の上。板は幾重の架橋をオクリはるか。奥へとフシ歩み行く。大彌太ほく〳〵打頷き。上の小袖脱捨つれば下に腹卷軍場の扮裝。袂より呼子の笛取出し吹立つれば。コハリ合圖に隨ふ日雇大工上張かなぐり立出づる。姿はゆゝしき武士の。腰に捕繩十手携へ大彌太が前に居並んだり。ナホス續いて内より娘の白梅。取成しやんと玉襷。長刀おつ取りすうわりのフシ腰も裳裾も引締めて。心を配る二皮眼。凛々しくも又なまめかし。地大彌太勇む顔ばせにて。詞ヲ、潔よし方々。本國信濃の證を忘れず。愚老が指圖に姿を變し。力となつて給はる段祝著せりと禮儀を述べ。さて此間心を付け試し見るかの大工。最前かれが妻女とて用ありげに來りしが。昔を慕ふ詞のはし。疑ひもなき惡七兵衛景淸と立聞きに知つたる故。普請に事寄せ脚代へ上げ置いたり。地色年頃日頃親子が願ひ。夫の仇聟の意趣晴らさん時節到來せり。不便や聟の箕尾の谷がいまだ此世に存へ居て。斯くと傳へ聞くならば嘸本意なくも口惜しからめ。とは思へども手に入る敵やみ〳〵と逃がしなば。月夜に釜の拔かり武士と世

上の譏り恥かし〳〵。番手はかねて定め置くはや踏込めと下知するにぞ。心は一致の信濃育ち。木曾の棧道それならでは上る梯の子村鳥の。羽音もかくや脚代の。踏所もッしどろに寄せかくる。地悪七兵衛景清は。心に豫て設けの敵土藏を小楯につゝ立つて。詞ヤア物々しや事をかしや。景清を搦めんとは大黒柱を蟻の髭と。地嘲笑ふ隙間を見て。捕つたとかゝる一番手。はつしと蹴られころ〳〵ころ。道具屋勾配するどき瓦屋根巴に並んで三方より。駈寄ればまつかせと。手斧にちよんと首飛んで。こけらを風の吹きしく如く遙かに投げて鑓鉋。遁さじ者とひよつと出の。頭はつしとさい槌に。目を白。黒と三つ目ぎり。此世のッシ息をはなし鑿。手並に鐵鎚鋸のナオス目に立つ相手もあらばこそ。一度にどつと群がるを。當り任せにひつ掴みばらり〳〵と投げ抛るは。大工の業とて棟上げの餅撒き散らす三重へ如くなり。地大彌太今はたまり兼ねヤア娘我に續け。悪七兵衛景清が鬼神にてもあらばこそ。ヨウヨ父様さうでござんす。人と人との勝負づく命を捨てば易かりなんと。親子領き梯の子に駈上らんとする所。詞暫し〳〵根井殿御待ちあれと聲をかけ。躍り出づるは以前の左官。大彌太いらつてヤア緩怠なる妨げ奴。おのらが出る場所にあらず退去れやつと怒るにぞ。ヨ、名乘らねば實に尤も。斯く申す某こそ。地色聟舅の契りをなし置く箕尾谷四郎國時と。詞も引かぬにはつたと睨めつけ。詞白々しき紛れ者。汝誠の箕尾谷ならば疾くよりも名乘つて出で。悪七兵衛景清を搦めんと思ふ氣はなくて。三里下つて箕尾谷とはム、ウ聞えた〳〵。扨は景清が一族な。我々に心をゆるさせ此場を遁さん計畧。地娘構ふな捨て置けと又駈出すを抱きとめ御尤もの御詞。詞付狙ふ景清と名を聞きながらためらひしは。知し召さずや日本に悪七兵衛二人あり。内一人は質者にて井場の十藏といふ男子。様子を語れば事長し其實否を糺さん爲。最前より差控へ事の様子を窺ふに。毫氣の働き手並の程。正眞の悪七兵衛に極つたり。地色然る上は箕尾谷が武運を開くは爰ぞと思ひ。罷り出でたる某が誠の扮装御覽あれと。かなぐり捨つる獣着の菖蒲革には引替へて。勝負に益ある肌著の小具足。家職にあらぬ小手脚當。兜頭巾を覆ひたる下は誠の星甲。鎧は切れてと諷はれし。名は源平に隠れなきッシ箕尾谷とこそ知られけれ。地白梅嬉しさ飛立つばかり。扨はお前が箕尾谷様。詞縦ひ御身の恥辱はありとも連添ふ女房に何遠慮。疾くに在所もお知らせあり。地健でゐる氣遣ひすなとつい一筆の便りし

て。落付かせうといふ氣もなくあんまりな氣強さ スエテ 聞えませぬと搔口說く。詞 尤もの恨みながら。惡七兵衛景清に巡り逢はざる其内は。地色面目もなき箕尾谷と忍び暮せし甲斐ありて。今日只今景清に參り逢ひしが結ぶの神。運盡きて討たるるとも未來の契り違へじと。いふに悅ぶ父の大彌太頼もし〳〵。詞其詞が取りも直さず婚禮の盃。我が手に入つた景清を御邊に任すが聟引出。舅が寸志受取り給へ。地色ハア忝き御賜物。祝ひ納める緣の綱と。捕繩たぐり大音上げ。詞上總の七兵衛景清はいづくにある。去んぬる元暦の戰に見參したる源氏の武士。箕尾谷の四郎國時。汝にめぐり逢はん爲假に婆しの左官が鎧先。勇氣の荒壁打ちこぼち。三寸繩にくゝり上げん 地覺悟。覺悟と呼ばはつたり。詞景清こらへず進み出で。珍らしや箕尾谷。昔の弓矢引替へて汝も我も職人わざ。地色倉の鉢卷引締めて首の骨こそ强くとも。此七兵衛が腕先に受取り普請の力業。手並の手間賃覺えあらん猶も恥辱の上塗せよと。互に付け寄る身の構へ。眼を配り氣を配り。踏む脚代の壇の浦。屋島の戰今こゝに見るやとばかり 三度 挑み合ひ フシ 暫し勝負も。地付かざりしが互にひつ組む脚代の。板踏み碎き廣庭へどうど落ちたるはづみの拍子。景清上に重なりしをえいやと返す箕尾谷が。一念力の一筋に搦むる繩は勇士の意地 フシ 時の運命是非ぞなき。地誰かは斯くと告げたりけん妻の阿古屋かひ〳〵しく。幼子脊にしつかと負ひ。上帶しめて腰刀息をばかりに駈付けしが。夫の繩目に目もくれて胸は涙の闇ながら。そも何者の所爲ぞとあたりを見廻し。詞ヤアこなたは箕尾谷殿。京から下り先々へ付いて廻つて聞えぬ人。又ぬつぺりの口上手にこちの夫をたばかりしか。サア千も萬も入らぬ。地あの繩解いて主返しや。否か應か返事次第女子が差いても刀は刀。覺悟の魂違ひはないと反打つて詰めかくる。詞箕尾谷騷がず さすがは女血迷うたな。都にて逢ひし時景清に巡り逢はゞ。必ず本望遂ぐるぞよと番ひし詞忘れしな。何事も定まる運と思ひ諦めはや歸れ。いや〳〵いや〳〵諦めまい。地恩も情も義理も法も。夫には替へられぬとすらりと拔いて打ちかくる。どつこいさせぬと白梅が。中に隔つる長刀の鎬をけづる女どち。惡七兵衛立上り。戰ふ阿古屋に押隔たり。後手ながら引きすゆれば。なう情なや景清殿。此期に及んで妻子の命庇うての所爲か。せめて女の念晴し針で突いた程なりとも箕尾谷に手を負ふせ。死にたいわいのと フシ 齒噛みをなし身を悶。えたる叫び泣き。地さすがの景清もてあつ

かひ（スヱテ）暫しあぐみて居たりしが。ヘツエ是非もなや面目なや。詞某息の通ふ内詞には出さじと。思ひ極めし事ながら是なる女が方々を。敵よ仇よと付狙ひ。道に背かん不便さに仔細を語る聞いてたべ。何なう箕尾谷。地御邊は弟。こりや我は兄。一腹一生の兄弟なるはといふに人人顔見合せッシ是はと。驚くばかりなり。箕尾谷更に信用せず。詞我父母に離れしは八歳。はや東西も辨へたれば。地對面はあらずとも兄ありといふ事噂にも聞くべき筈。いか様仔細もあらんが。先づ父母の住所（すまひどころ）名字系圖はいかに〳〵。詞ヲウ父の名は愛甲（あいかう）の太郎國久とて源氏武士の浪人。母の氏は平家の侍上總の一統。住所（じゆう）は相州箕尾（みを）が谷（やつ）。地其時我は十一歳御邊は二歳。母の緣（ゆかり）の上總の家より。某を養子にせんと只管（ひたすら）の懇望（こんぼう）。詞父國久の仰せには。誼（よしみ）ある上總の家。筋なき事といふにもあらず養子となつて平家に仕へよ。さりながら。今より後は親子兄弟音信不通。それを如何にといふに。二歳の弟が人と成り父が名字を受繼がば。兄弟源平と引分かり。一戰に及ばん時平家の方に兄ありと知るならば。恩愛に迫り義理に迷ひ。思はぬ不覺を取りもやせんと。地行末思ふ親の慈悲弟が爲と思ひ。一生不通にしてくれるが。却つて親への孝行と。理に當りたる父の詞我はそれより平家となる。御身はいまだ二歳にて何辨へもあらぬ上。父母深く隱せしなれば兄弟ありとも知られぬ筈。詞我も御身の面體は覺えず。愛甲の家の名字。改めしとは元より知らぬ。箕尾谷四郎を弟と知つたる證據はこりやいい女房。地我が懐（ふところ）の一包み人々に見せてくれと取出させ。壇の浦の戰に引きちぎつたる兜（かぶと）の鍬（しころ）。我が高名の證（しるし）ぞと取つて歸りよく見れば。詞裏書に記せしは弓矢神の御詫宣（ごたくせん）。八幡座より鍬まで書下したる父が筆。即ち愛甲の名字の因緣。愛する甲は家の重寶是を著せし箕尾谷は。地我が弟にてありけるものをあゝら出なき手柄だてと。悔むにかへらぬ浦波の泡（あわ）と消行く平家の果。我一人殘りしは運強き景清。詞頼朝を討つべしと不敵にも思ひ立ち。根氣（こんき）を碎くに甲斐もなく無念の月日を暮す内。箕尾谷四郎國時が我を狙うて尋ぬると是なる阿古屋が物語。つく〴〵思ひめぐらせば。地也誠の父が形見といひ廣い天地の其中に。たつた獨の弟憐みをかくるは兄の道。所詮頼朝を討ちたるとて。昔の平家と取立つる公達（きんだち）とてもあらばこそ。詞此上は我身を捨て弟に高名させ。弓矢の家を起させんと。思ふに幸ひ緣を引いたる此屋敷。御邊に尋ね逢ふものか二つには又運に叶ひ。頼朝に出會（でくはし）さば。本望遂げんと入込

みし。地鋏思案の抜目なく巡り逢うたる我が弟。命を惜しまぬ働きを感ぜし故に景清が。褒美の縄目にッシ及びしぞや。地只今返す其鋏兜に繼いで家も繼ぎ。手柄は輝く星兜と武士の名を照らしてたべ。此上に兄なりとて縄を解かば直ぐに勘當。他人となる景清取逃がしては恥辱に恥辱。重ぬるが合點かと裏釘かへす詞詰めッシ心にこたへて頼もしき。地箕尾谷はつと飛退去り頭を地に着け涙を流し。親の御慈悲兄上の御情スエテ何と報ぜん詞もなし。知らぬ上とは言ひながら勿體なくも組伏せて。昔の武士に歸らんと笑を含みし淺ましさ。六度契りて兄となり惠みもあるに弟は七度の結びなしもせで。結び搦むる縛縄。天の照覽そら恐ろしよし御勘當あらばあれ。いで縛めをと立寄れば振放つて愚々。詞弟と知らず兄と知らず。知らぬ昔は歸らぬ道。互の因果はあざなへる縄目と思へば悔みもなし。女房ももう吠えな。豫て斯くと語りなば。心落さん不便さに是迄は隠し居たり。地色鎌倉へ引かれなば大方長い別れならん。何言ひ殘す事もないが娘を無事にとばかりにて。餘所目遣ひに紛らす涙阿古屋はとかうの返答も。ッシ泣沈みたる憂き思ひ。地察しやりて白梅が私が縄を解きますれば。どつこへも障りはなしと又景清に取付けば。詞ヤア小ざかしき弟嫁。此縄解いて侍捨てさせ。地誠の左官と成下らせ土に夫の顔汚せか。サア一時も早く鎌倉へ伴へやつと立れば。情ない兄人。某が身にもなりスエテ思ひやつてと掻口説く。ヤア聞分けもなき男子。イヤ御身こそ聞分けなしと。爭ひ果てしも歎きに沈むは二人の女房。根井太夫横手を打ち。詞仁なる哉義なる哉。先刻より感涙に目を泣きはらし候よ。箕尾谷が心底の切なさ推量はしつれども。景清の志深き辭退は却つて不孝。地色せめての恩を報ぜんは阿古屋殿を身に引受け。幼き娘を養子とせよ此大彌太が初の孫。時しも三月十八日。今日の祭の神堅く人丸姫と名を呼びて。育てる老の樂しみと歎きの中の悦び顔。景清あつと頭を下げ。頼もしき御詞望みは足りて一門一家。めぐり逢うたる月も日も其元暦の屋島の戰。取りも直さず三月の十八日信ずる佛の御緣日。臨刑欲薄終念彼觀音の。力を得ん事疑ひなし急げ。や急げと先に立ち。勇むは縄付縄取りは。心萎れてッシ行きかぬる。阿古屋は夫に恥ぢらひて涙。呑込む。曇り聲幼き娘を。抱き上げ是なう今の父様が。詞鎌倉へごさらしやる地目出度うやがてお歸りと。さゝう〳〵してたもう。其次手に元の父様顔の見納め見せ納め。永いさらばのささうをしやと。我が身の心かこつけの。

詞も涙にッシむせび入り身を打ち。伏して歎くにぞ。かゝる哀れに大彌太も涙濡ゆるしば〳〵目。詞浮世の中に武士程養理の悲しきものはなし。言ひたさ泣きたさ堪ゆる辛さ。なぜに二人は腹からの左官や大工に生れなんだ。地職人の身ならばなあ斯うした事はあるまいものと。さすがは老の繰言に。白梅阿古屋も顔見合せ。包み兼ねたる歎きの色わつと涙の。ッシ糸櫻庭の。立木に紛ふらん。地景清わざと怒りをなしヤア未練なり愚かなり。源氏育ちの侍は會者定離をも辨へず。妻子を忘れ親を忘るゝ弓矢の義心も知らざるか。恥を恥とも思はずやと聲荒らかに言放せば。大彌太歎き押しとゞめけに誤つたりそれよ〳〵。晉に聞えし景清を。搦め捕つたる箕尾谷が譽は朽ちせぬ石墨。根井の太夫が家名を穢げと門出罵ぶく言の華に。深き涙を忍びの緒兜も昔に立ちかへる。鍬の星の花の兄。勝つ色見する御惠みと勇み立つたる匂ひ鳥。連なる枝に若木の花嫁老木の松に嬰兒の。いたいけ盛り見殘して惜しむや。春の星月夜鎌倉。差してぞ急ぎける。

第五

地百戰百勝勇士の名を定め難し。死を易くして名を顯はすといへり。上總の景清自ら頼朝の手に渡れば。扇が谷に詰牢をしつらひ取つて押入れ。警固は在鎌倉の諸大名。一日一夜宛番代りに預りてッシ嚴く非常を警めらる。地根井の太夫希義當番にて未明に相詰め。見れば門々番所の幕蛸の紋所。詞昨朝より今朝までは岩永左衛門當番よな。根井の太夫番代りに參つたりと。地言入るれども役所を渡す體もなく。走つて出る人息を切つて戻る人。足を飛ばせ櫛の齒を引く如くなれば何事やらんと根井の太夫。不審ながらも立休らひ返答ッシ遲しと待居たる。地暫らくあつて御通りあるべしと案内させ。岩永左衛門しを〳〵と立出で。詞ヤア根井殿。早速の御番代り御大儀千萬。お日にかゝつて詞もない。先づ以て箕尾谷殿景清を生捕り高名比類なく。貴殿も昔に立返り御親子並んでの御勤め。目出度いと申さうか御大悦推量致いた。さて其景清に就いてちと。御了簡に預らねばならぬ譯あり。お聞きなされ。牢を脱けついと致した。とは入口の錠おろさずか。但しは水道圓などより脱け出でしか。いづれの道にも地無念なりと肝潰せば頭を搔き。詞それなれば下々の無念と申譯もあろが聞いてたべ。檪白檀梅の木の長さ一丈ある物を大地へ七尺堀入れ。上三尺の詰牢。榮で蜘蛛手格子を切り組み。一尺二寸の大釘裏を返さずひつしと打ち。足

を牢より外へ引出し入達へ。七十五人して引いたる桶にて上げ繫を打たせ。十挺詰鐵たう〳〵樞。大盤石を積重ね。首には根堀りの大竹筒に切つて被かせ身動きもならぬ。これ御寛なされ此牢を。地色破りましたと幕引き退くれば立寄り見てびつくりし。詞是程丈夫に拵へたを。破る音が御邊の耳へ入らざるか。サテ面目もない側に居て微塵も耳へは入らず。くつつりと寝た間の夢程も存ぜなんだ。只今より明朝迄は貴殿の御番。此通り言上なさるれば此岩永。よい仕合せで遠嶋は見えてある。御了簡と申すは餘の儀でない。方々へ追手をかけたれば召捕つて歸るは早うて五つ遲うて四つ迄。沙汰なしになされ下さるれば大名一人お取立て。ハテ目に見えぬ事に。堂塔建立さへなさるゝぢやござらぬか。根井殿。ナ申しと地甘へかゝれば何さ〳〵。詞箕尾谷といふ廳病者の子を持ち。飛沫のかゝつた此太夫に賴む事はない筈。地ハ、、、と苦笑ひ。詞是は術ない。それを爰で仰せられては消えたい〳〵。白梅殿御婚禮何やかやのお悦びに免じ。地是非お賴みと手を摺る所へ。荒木源五息を切つて駈付け。詞悪七兵衛景清を三个村と申す所にて生捕り。只今是へ引いて參ると訴ふれば。地岩永生々いきり出しヤア根井。詞賴む事何もない。追付け景清渡し申すと。地手の裏返す舌も引かぬに前後を圍みッシ警固きびしく連來る。地根井の太夫きつと見ムウ。詞是が逃げた景清かハ、、、、。箕尾谷が生捕つて差上げし景清に似は似たれどもさうでない。察するに是はかの井場の十藏。地景清にして此根井受取る事罷りならず。刻限移る此通り言上せんと立出づるア、親爺樣せはしない。詞まあ半時待つてたべ追付け誠のが來ますわいの。やい者ども。追々に又往け地往けと追ひかけさせ。扨はおのれ講釋師めか下河原でも取違へ。一度ならず二度ならぬ妨げ奴。何として腹癪んと立蹴にどうど踏倒し。足に任せてさいなむ所へ。誰が訴へしか賴朝公重忠に口取らせ。蹄を飛ばせ駈付け給へば岩永大きに敗亡し。頭に天の落ちかゝるかとッシ土に。平伏し恐れ入り。詞只今言上仕らんと存ずる所御駕を苦しめ奉る。夜前景清牢を破り脱け出で候。言語道斷の地憎い奴と。言はせも立てず馬上ながら御聲高く。詞牢に入れたるばかりにて逃失せぬものならば警固を付けるに及ぶべきか。長く一人に番させては怠り油斷もあるべきかと。一日一夜を限つて代る〳〵警固せよと言付けしは何の爲。牢を破つたる景清に科はなし。番を怠り牢を破られ。取逃がしたる汝こそ憎い奴。諸士の見せしめ急度刑

罰に行へ重忠と。地御立腹大方ならず見えたる所へ。箕尾谷四郎汗を浸し駈來り。詞牢を破り落失せたる景清。是へ參上仕ると地申す詞の下よりも。長地妻の阿古屋に手を引かれ片手は杖をつく〴〵と見れば兩眼抉出し フシ東西。わかぬ其風情。地十藏驚き走り寄り。御身が事を聞いたる故何とぞ奪ひ返さんと來る所。詞景清牢を破り落失せたりと尋ね廻る。嬉しやよい所へ出會せし。兼ねて命に代らんと念願は爰ぞと悦び。景清是にありと名乘つて易々と生捕られしは。其間に落延びさせん爲是まで來る十藏が。地志は無になつたか直ぐにいづくへも落ちてくれぬ。側からもなぜ氣を付けぬ妹。エ、十藏が思ふ程にない。曲がない景清と地團駄 フシ踏んで。泣きければ。なう其氣も付いたれど。汝が知つた事ぢやないと叱られて。泣いてばかりと縋り付き重ねて袖を絞りける。地重忠御覽じ珍らしや景清。詞牢を破り遁れ出でたる身のいかなれば立歸り。殊に兩眼を抉つて盲目となりたるは訝しゝ。地頼朝公も聞し召す。心底を明かされよ承らんと宣へば。詞アさ宣ふは秩父殿候な。お尋ねなくとも申上げんと存ずる所存餘の儀にあらず。斯く御敵となつて付狙ふ我なれども。地とかく命を助け御味方に。召されん爲の御情申すに及ばず。海はあせて山となるとも二君に仕ゆる我ならねば。詞所詮この牢踏み碎き。關破りの科を拵へ害せられんと心付きしが。思へば其日の警固の侍。牢を破られ取逃がし。我故咎めに預らんも罪造りと。一日々々延ばせし所。昨朝よりは岩永が。番に代つて面を見るよりあら嬉しや遺恨ある左衞門。咎めに遭うが殺されうが。去にがけの駄賃とやらん今宵ぞ牢の破り時と。何の苦もなく脱出でしは。外に科を拵へて誅せられんとの フシ我が念力。地もう助けては政道立つまじ。急いで我を誅せられよ。又兩眼を抉つたる事。今鎌倉の繁昌。頼朝の威勢を見るにつけ再び仇をなすまじと。思ひ捨てゝも凡夫心。見ずば恨みも起るまじと頼朝を再び見ぬ分別。未來永々仇をなすまじ。恨みを殘さぬ心の誓ひ。抉り捨てたる兩眼は。頼朝殿へ景清が。今生未來の フシ寸志ぞや。サア首打つて安堵あれと首差しのぶれば頼朝公。天晴れ武士よ武夫よ。平家の恩を忘れぬ如く。又頼朝が恩をも忘れず。月日に象る兩眼を我故抉つたる健氣やと。勿體なくも御大將御落涙ぞ。有難き。地左衞門一人むくりを起し。詞ヲ左程飽いた首ならば左衞門がさらへ落し。牢を破られ取逃がした地申譯にすると呼ばはれば。餘りの事に御大將。兎角の御詞もましまさず阿古屋堪へず。詞

あの言うた面わいの。目の見えぬ人の首取つて。言譯になるか。手柄になるか。地阿呆臭いと ッシ恥かゝすれば。詞女房だまれ。岩永が手にあふ者は盲か。蹇か。子供ならで外にはなし。尤も〳〵。ならばサア首取つて見よ。梟は土を丸めて我が子とし。海月は鰕を以て眼とすること楞嚴經にありと聞く。地我その如く阿古屋を以て眼とせん。後より我を介抱し双の向ふ其方へ。引廻して教へよと杖打振つて立上れば。詞源五手傳へ。盲目とてぬかるなと 地ッシ左右に別れ斬りかくる。地根井親子は景清に緣ある顏を憚りて。餘所には知らぬ氣を揉上げ心を冷して扣ゆれば。十藏は又景清が詞の意地を立てさせんと。留めず差出ず縛られながら眼を配り。すはと言はゞ飛びかゝらんと打つ太刀先に氣を付けてそりや。そりや。右よそれ左よ。拂へなぐれと詞をかけ。我が手を以つて戰はぬ心の双の鏑をけづり。頭に上る息烟は火花を散らす如くにて ッシ瞬きもせぬ。程もなく岩永主從太刀打落され。二人一度にしがみ付き取つて伏せんと身をもがく。景清ちつともたぢろかず。詞二人が首筋兩手に掴み。ぐつと締むれば眼を見詰め。地弱る所を取つて伏せ膝にひつ敷き。一息ついたる心の内 ッシ嬉しさ例へん方もなし。地其際に阿古屋立寄つて十藏が縛め切りほどけば。詞なう〳〵 景清。一人に二人は手柄過ぎる。岩永は 地我にくれと取つて引立て。科はおのれが心に問へと首。えいやつと捻切れば景清悅び。おのれも主の供せよと源五が首も一時に。ちよいと引拔き捨てたるは手習ひ子供の書捨てし ッシ筆の首拔く如くなり。地十藏片方の太刀おつ取つて大音上げ。詞助けんといふ君には君の情あり。討たれんといふ景清は二君に仕へぬ忠義あり。中を取つて此七兵衛景清が腹切る上は。情も忠も是迄なりと地太刀を逆手に取直す。重忠 御覽じヤアヤア十藏。詞景清が事は此 曉。洛陽清水寺の觀世音君の御枕に立たせ給ひ。命を助け得させよと。御臺所も目のあたり鑒夢を蒙り給ふ。地それ故是まで御馬を出されたるとはよも知らじ。假にも景清と名乘つて生害せば。大慈の加護に背く道理。名代の切腹尤もながら無益なりととどめ給へば。詞然らば御家人岩永を手にかけ討つたる其誤。地井場の十藏に立返つて切腹せんと。肌押脫いで身繕ふ頓朝扇を上げ給ひ。詞やをれ十藏。左衛門を討ちたる其科を糺明せば安穩に腹切らすべきか。我この曉。景清を助けよと觀世音の靈夢を蒙る。さればこそ左衛門が。盲目の景清に刃向ひしを制せんとは思ひしが。大慈大悲の擁護ある景清やはか過ち

はあるまじと。地思ふに違はず却つて主從手にかゝりしは。景清十藏が殺すにあらず。二人に千手の手を貸して惡人を殺させ給ふ。是こそ還著於本人經文あらたに誤りなき。フシ大悲の誓ひと覺えたり。地然るを汝切腹せば菩薩の勸善懲惡の。心に違ふ大惡逆恐るべし〳〵。詞今より我に奉公し譽を末世に殘すべし。又景清は扶持すべき平家もなく。賴朝が祿も受けまじければ。飢に疲れん不便なり。地兩眼は暗くとも志は日に向ふ。日向勾當の官を蒙り。馴染みの平家を琵琶に語つて片時も昔を忘るべからず。萬事は根井親子の者宜しく計ひ得さすべし斯樣に上下和すること念彼觀音の御力。我が大慶これに過ぎずいざ歸らんと立ち給へば夫婦兄弟箕尾谷父子。頭を大地に平伏し平伏し。詞は無くて有難涙拜み〳〵。君をかしづき立歸る佛道武道の助けとして。治まり靡く源氏の政道。萬々歲の末かけて盡きせず。盡きぬ八千代の松變らぬ色吳竹の。節を重ねて栗も繁る五穀。成就民安全治まる。國こそ目出たけれ。